

第12回全国バス学習研究集会

(小・中・高合同)

提 案 要 項

期 日 昭和52年11月4日(金)

会 場 姫路市立城南小学校



主催 全国バス学習研究会
姫路市教育委員会
中播バス学習研究会
姫路市立城南小学校

後援 兵庫県教育委員会

第12回全国バズ学習研究集会

主体性に迫る 授業の創造(算数科)
—意欲的に課題に立ち向い
自己実現かできる子をめざして—

龍野市立揖西小学校 福田 節子

1. 研究テーマと その要旨

集団の中で、自分の意見や考えが はっきり言えるには、
或る程度学習の基礎の積み上げが 定着していないと 自
主的な 自己実現はむずかしい。

そこで、事前テストによる 児童の実態把握(既習力の
定着度)をもとに 学力の差を少なくする手だて(個別指導
フィードバック)と共に 教材研究と 授業の中で、これらの児
童が 意欲的に活動する場面の設定が 大切ではないかと
考える。

2. 研究経過の概要

(1)事前テストづくり(算数)——ふ.51年 2学期末

(2)事前テストの 検討 ——ふ.51年 3学期末

(3)事前テストの 実施 ——ふ.52年 4月より

○既習学力の実態把握 ——新教材へステップの基礎学力
全体的傾向、個別の学力を把握する

○低学力児の個別指導(フィードバック)・自己実現の意欲づけ

○教材研究・授業計画の中に 児童の実態を折り込む

・課題の 構造化

・指導法の検討

・教育器械の活用・教具の工夫(授業の具体化・効率化)

・課題提示の方法

・課題意識の育て方

3. 問題提起

(1) 基礎的な学力の定着を どのようにすればよいか

○ 自己実現の出来にくい原因

A. 知っていても、恥しいから言えない。

B. 解答や、自分の意見に 自信がないから言えない。

これらの児童は、小集団の中で、支え合う仲間づくりをめざして、温い人間関係を育てる中で、勇気づけられ、自己実現への努力や、問題解決に挑戦させることができる。

しかし、

C. 課題の意味や、教師の発問の意味が、わからない。

D. 尋ねられていることが わかっても、どう解いていいのか、どう調べていけばいいのか わからない。

これらの児童は、既習学力の積み上げが、定着していない。そのため、基礎学力を活用して、発展的な思考が、働かない。学習集団の中で、いつもおんぶ役。このような 依存的な態度では、無気力な人間になってしまう。これでは、学習の充実感、満足感が持てないばかりか、学習意欲も、思考力も育たない。

全員が、自分の考えを持ち、学習に生き生きと参加できるようにするには、基礎的な学力の定着を どのようにすればよいだろうか。

(2) その他、教えていただきたいこと

○ 学習意欲を高めるための 課題意識のもたせ方。

○ 課題提示の方法。

○ ひとり勉強と ノート指導。

第12回 全国バズ学習研究集会

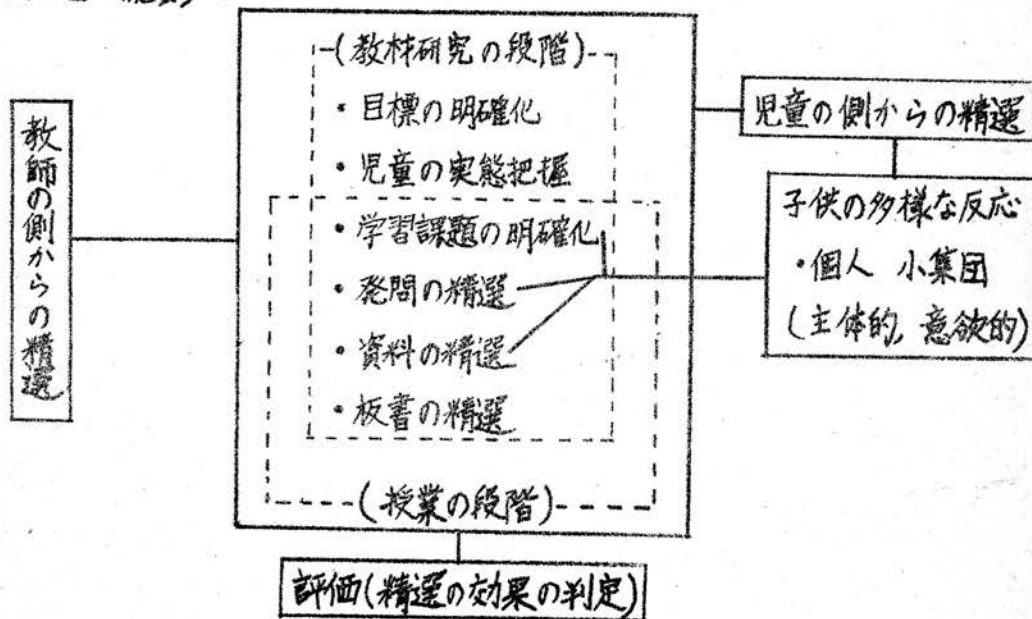
考える力を伸ばすための教材の精選化

姫路市立安室小学校 古岡利量

〈研究テーマとその要旨〉

わたしたちは、よく教材の精選ということを口にするが、いざ授業をやる段になると、過去の経験や親切心から、あれもこれも知っておいた方が子供のためになると思って、つい教材の量を多くしているように思える。教材の量が多くなると、時間的に考える余裕がなくなって、どちらかといえば網羅的な記憶中心の授業になりやすい。わたしたちは、教材の量が多いから、ある程度はしかたがないとよく言うが、大半は教師側に問題があるととらえている。たとえ、資料や発問の精選ができていたとしても、子供の実態(到達度、意欲、興味、関心等)に即していない場合が多々あったと反省している。そこで、考える力を伸ばすための精選はどうあるべきかというテーマを設定して、現場で実践できる精選について考えてみた。

〈研究経過の概要〉

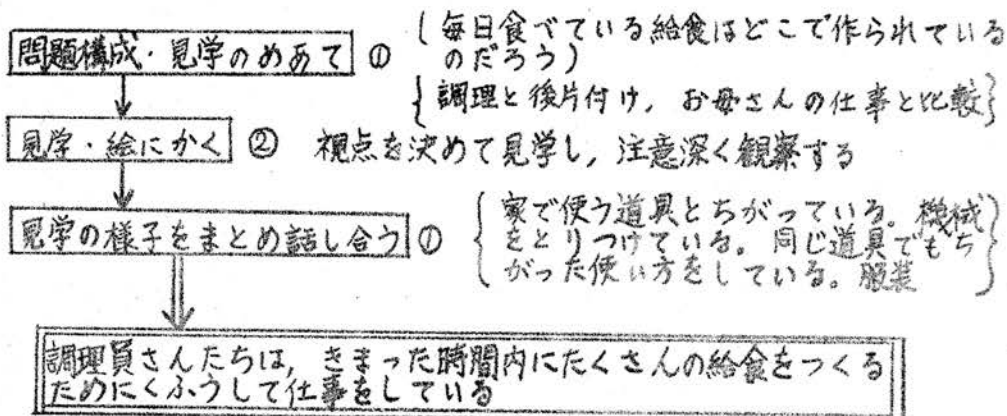


実践例 1年「がっこうめぐり」

〈内容の精選の視点〉

- 子供の学校生活と密接なかかわりをもつもの
- 直接観察できるもの
- 具体的観察を通して、仕事の意味追求ができるもの

〈きょうしよくしつの展開〉



〈児童の実態をとらえる〉

給食室は、子供にとって大切なところであり、予備知識は持っているが、断片的である。見学し、絵にかくことによって興味、関心、理解度が高まった。

〈社会を正しくとらえる上で大切なこと〉

視点をきめた具体的な観察

〈転移性、発展性のあるもの〉

ここで得た探究方法と認識を駆使しながら、他の人々の仕事に適用する。

〈問題提起〉

精選の研究をするには、何と云っても精選が効果的であったかどうかの判定が一番大切である。評価なくしては、教師のひとりよがりにとられてもしかたがない。そのため、一時間あるいは小單元の中で、即時評価や形成的・総括的な評価をしていくのであるが、客観的に精選の妥当性を判断することは大変困難なことである。

第12回全国バズ学習研究集会

確かな読みとりの力をつける学習指導をめぐって

姫路市立船場小学校 三村寛次

1. テーマについて

- ・人間性豊かな児童の育成のためには、まず豊かさに通ずる確かさを身につけさせることが基盤となる。
- ・すべての児童が読みとりの学習に参加でき、読みとりの基本的な技能を確実に身につけていくためには、どうしなければならないか。

2. 確かな読みとりの力をつけるために

(1) 教材研究(作品研究)について

- ・おうちある文章を豊かに読ませるために —— ゆとりと充実
- ・表現 —— 基礎的言語事項のおさえ

(2) 児童の読みの実態把握とその対策

- ・読みの実態が確実に把握されているか
- ・下位グループが読みとりの学習に参加できるためのてだて
—— グループ学習
- ・音読をもっと重視しよう

(3) 言語事項をおさえ、叙述に即した読みとりを

- ・言語事項に支えられた読み
 - ・一語一文をだいじにする読み
 - ・調べ読み、書きこみ —— まず自分の読みとりを確実に
- ・叙述に即した読みとり
 - ・叙述に即した読みとりとは
 - ・叙述に即した読みとり方の一方法
- ・読みとりの過程の中に書くことをどうとり入れるか。

(4) 主体的な読みの姿勢づくり

・これまでの国語の授業の反省

・教師中心の発問応答型に偏りすぎたことへの反省

・一問一答

・優秀児のみの活躍

・話し合いに偏りすぎ

落ちこぼし

・読みとり方を、児童と教師とで考えよう

・発問と課題

・発問は教師のものか、児童のものか

・読み手サイド⇒登場人物 作者サイドにたった発問とは

・どこで、どう グループ活動をとり入れるか

・まず ひとりで読みとろう

グループで → 全体で

・全員参加ということ

3 話しあいたい問題

★ 確かな読みとりの力をつけるために、基礎的な言語事項を、どこで、どうおさえるか。

★ 児童の読みの実態をどうとらえ、全員が読みとり学習に参加できるためには、どうしなければならないか。

★ 国語科の教師中心の授業を、児童主体の授業に切りかえるには、どうすればよいか。

第12回全国バズ学習研究集会

— 課題はどのように作成していったらよいか —

愛知県豊田市立小清水小学校

<研究テーマとその要旨>

バズ学習では、準備・中心・確認の3つの課題により、授業が組み立てられ、展開されている。課題により児童に問題意識を持たせ、それを解決することにより、理解や思考を高め、知識・能力を形成していこうとしている。まさにバズ学習を進める上で、最も重要な役割を持つと考えられるこの課題を私たちはどのようにして作成し、提示しているだろうか。作成意図があいまいで、教材のねらいだけを考えて作ったおしつけの課題が多くはないのか動いている子どもの考えをつかみ、そこから課題を作成し、投げかけていつてこそ、意欲的な課題解決の姿勢も、たしかな理解も生まれてくると考え、課題をどのように作成するか再検討することにした。

<研究の概要>

これまで、私たちは次のような課題作成の観点をあげてきた。

- 自発性を促進する課題

児童が課題に意欲的に取り組み、生き生きと目を輝かせ、学習を進める場面、そこには児童の自発性が大きく働いている。それを支えているものは児童の感情・要求・関心・興味などである。児童の自発性を持続させるような課題を構成する。

- 未来不確定性を内包する課題

児童にとって学習の結果や結論が前もってわかりきっていないということである。児童が既習事項を想起したり、問題の取り扱い方を操作していく過程の中から、前述の結論を自らが導き出すところに学習への感動があ

るのである。児童が知的作業の中に結論を見つけ出すことのできるような課題構成を工夫する。

- 努力を必要とする課題

努力もなしに解決できるような課題では感動はうすい。感動は課題解決に要する努力に比例するものである。課題を前にして、児童が主観的ではあるが「ちよつとむつかしいぞ。でも一生懸命にやればできるかも・・・」という期待と、課題をといていく過程において努力や工夫が必要であるような課題を構成する。

現在もこうした観点に立ち、課題を作成することに変わりはないのだが、どうしたら、自発性を促進する課題、未来不確定性を内包する課題、努力を必要とする課題がうかびあがってくるのか、そのねもとをどこに求めるかが問題となってきた。

そこで、次の2点から考えることにした。

- 教材解釈から（学習のねらいを明確にふまえ、教材を構造的にとらえる。）
- 児童の実態理解から（事前調査、発言、ノート、行動の記録などから、考えや理解のようすをとらえ、個々の児童が何に興味、関心を持ち、こだわりを示しているかつかむ。さらに、それを学習にどうかかわらせていくかを検討する。）

後者について、その必要性は感じてはいるが、いざ課題作成となると前者の立場の色こいものになってしまう。子どもが課題を自分のものと受けとめてこそ、その解決をめざして行われるバス活動も積極的に進められるのではないか。してみると、後者から課題を見つけることが主軸となり、それを学習のねらいにどうせまらせていくかという姿勢で取り組まなくてはならないのではないか。

この具体的な実践を1年生の国語の学習から見てみよう。

- (1) 子どものノートから課題を作成する。

生き生きとした形象を思いえがきながら、文学的教材が読めるようにするため、またひとりひとりが興味を持ち、考えの足場を築くことができるよう

にするため、絵本づくりを続けてきた。

その2冊目・場面のようなすや主人公の気持ちを多様に想像しながら、話の筋を読みとることができるようにと願って計画した「かえるのあおちゃん」の学習。

• 場面構成

- ① 主人公あおちゃんの紹介
- ② かたつむりに言われ、自分も赤いかえるになつてみたいと思う。
- ③ 神様におねがいして赤いかえるにしてみよう。
- ④ ヘビに追われたところをかたつむりに助けられる。
- ⑤ 神様にお願いして、もとの色にしてみよう。
- ⑥ 親がえるに事件のあらましを話す。

第3場面

神様やあおちゃんは何と言っているかな（準備課題）

（絵本のふき出しに書いたことばの出し合いをさせる。）

神 様

- いいよあおちゃん赤いかえるにしてあげるよ。
- 色がきれいだとヘビに食べられちゃうよ。
- いいよ、あおちゃんもなりたいかい。けど、ヘビにおそわれるよ。
- ようし、赤いかえるにしてやろう。でも森のおくに行つたらヘビが出るよ。
- ヘビに食べられないように気をつけるんだぞ。

あおちゃん

- よかつた。よかつたやつほう。
- 赤いかえるにしてみよう。うれしいなあ。
- 神様ありがとう、ほんとうにありがとう。

神様はヘビに食べられちゃうよと言ってるよ、それでもあおちゃんはそんなによろこんでいるの。（中心課題）

- 浩 「あおちゃんはすつかりうれしくなりました」と書いてあるでしょう。
だから、神様の言ったことあんまり聞いていなかったんじゃない。
- 稚 ほくたちだつてあるでしょう。うれしくてしようがない時、ばんざい、ばんざいつて言うから聞こえんのじゃない。
- 和 すつかりうれしくなつて、ヘビのことなんか忘れたのだと思います。
すつかりに注目し、あおちゃんの気持ちを考えなおし、神様、あおちゃんのことばは、同時行動ではないのかと、自分が主人公になりイメージづくりをしていく。

(2) 子どもたちによる問題づくりから課題を作成する

自分が疑問に思うこと、不明な箇所を追求していくもの、あるいは文字に表わされていない行間の意味をさぐろうとするものを「だれが」「いつ」「どこで」「何を」「どうした」「なぜ」「どんな」「どのように」などの問題の形にして出させ、課題化し、未知の世界を発見させたり、原因、結果、理由、意見等を考えさせていく。

全文音読 → 問題提起 → 問題づくり → 分類・整理 → 課題化

「おむすびころりん」で、おじいさんはおむすびを落したり、穴に落ちたりしてあわてんぼうとしていたK君は、「どうしておむすびをひとつのこらずころがしてしまつたの。石をころがさなかつたの。」という子どもたちの作った問題から、やさしいおじいさんの姿を感じとつている。また「どうしてねずみがおじぎをしたり、しゃべるの」という問題から、ねずみとおじいさんの心のかよい合いを想像し、感想をふくらめている。

<問題点>

- 準備・中心・確認の課題が、子どもたちの問題追求の過程でありたい。そのために子どもたちの考えをつかまえようと努力するが、なおもとらえきれず、課題の修正を余儀なくさせられ、はいまわりの1時間となつてしまうことがしばしばである。
- 子どもから出された素朴な疑問を、もつと全体にひびく課題、個々の考えがねじれあいながら考えを築いていける角度をつけた課題にしていかねばならない。

(5 2 . 1 1 . 4)

第12回 全国バズ学習研究集会

指導と評価の一体化

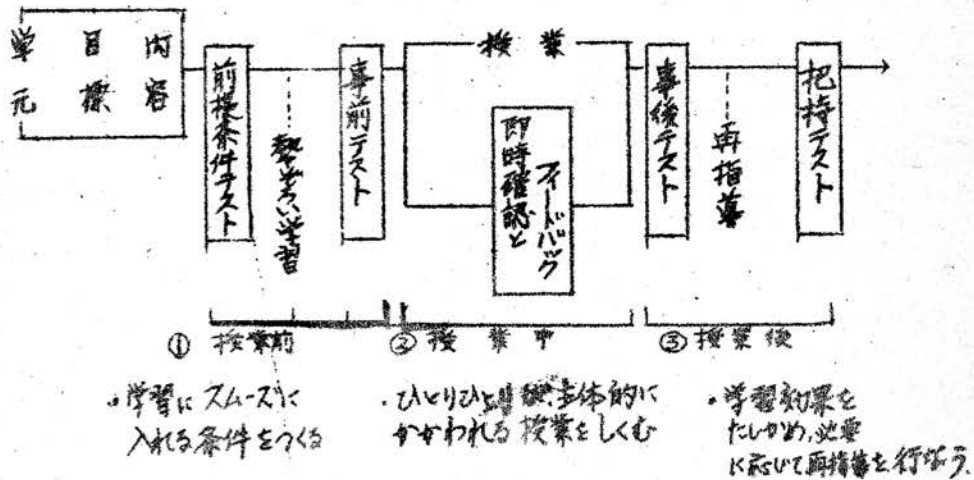
姫路市立広峰小学校 教諭 上野勝己

<研究テーマとその要旨>

- 本校では、ここ数年来、指導と評価の一体化を図ることによって、指導を確かなものにし、ひとりひとりの学力を高めていくことにしている。

<研究経過の概要>

- その基本的な授業展開のすじ道は、下図の通りである。



ここで私たちが願ったことは、

- (1)子ども達の、わかり方や、考え方に即して授業を展開していこう。
- (2)そのために評価をひとり歩きさせるのではなく、一連の評価活動を、授業前、授業中、授業後、に位置づけ、計画的に実施することにより、指導をより確かなものにし、学習効果を高めることに集約できる。ところで、この筋道で実践を重ねていく中で、次のような問題点がでてきた。
 - 目標のおさえ方が不十分なため、適確な学習活動が仕組めず、又評価の

観点もぼやけ有効な情報が得られない。

- ・従って本来のフィードバック機能が十分発揮できず、初期の学習効果があげられない。
- ・目標の片寄り(認知的なもの)が見られるし、相互のつながり(目標構造)が希薄である。

そこで、指導のあり方すべてを左右する目標のおさえ方に焦点をあて、授業改善を試みることにした。

授業改善の視点



(ウ) (ア)(イ)をもとにして作成したマトリクスによる有効な学習活動

(※) マトリクス(社会科)

過程 ↓ 実 問題	認知目標	認識	思考
	事実認識		

- ・たて軸に学習の流れ(探究学習)と学習内容をとる。
- ・よこ軸に社会科でねらう目標(認知領域、態度領域)をとる
- ・学習中にねらう、おさえるべき目標をおく

(マトリクスの資料は分科会で配布)

<問題提起>

(認知目標と態度目標の相あい)

- (1) このマトリクスの妥当性と信頼性があるかどうか。
- (2) マトリクス作成の手順方法は、これでいいかどうか。
- (3) 単元によつてのマトリクス作成の難易度をどうするか。
(個 → 全体への普及)
- (4) よりよい利用法と簡便化への手だてはないか。

<特に討論を希望する問題>

- ・本校で実施しているマトリクスによる目標の具体化、構造化について。

第12回 全国バズ学習研究集会

ひとりひとりの探求する力を育てる学習指導のあり方

姫路市立安室小学校 苗村道弘

〈研究テーマとその要旨〉

激動の時代・情報過多の時代において、教育に期待されることは、自らの意志で情報を処理し、創意ある発想のもとに、知識・技能を駆使して、問題を解決できる子どもを育てることである。

このことを理科教育にあてはめてみるならば、新たに直面した場面において、主体的に問題に取り組み、事実にして、解決し、より深く、自然を探求する力を育てることであると考え。

そこで、上記のテーマを設定し、評価を効果的に位置づけ、ひとりひとりの子どもが日々の学習の中で、集団とどのようにかかわり、どのように変容したかを的確にとらえることにより、有効な学習指導のあり方をさぐるものである。

〈研究の概要〉

- ・理科の学力——自然の中から疑問をみだし、これを事実にして、すじ道をたてて考え、解決し、より深く自然を探求していく力。
- ・探求する力を育成するための3つの要素
 1. 意欲、意志——強い意志と意欲をもって課題に取り組む。

2. 科学的な能力 — 先行経験を駆使して、課題解決のための実験・観察や思考の操作をする。

3. 知識・理解 — 課題や問題にひそむ原理・法則をつかむ。

・具体的な取り組み

1. 目標の明確化

2. レディネスの実態把握

3. 教材内容の精選

4. 指導過程の工夫

5. 疑問や興味をもち、探求心を誘発する導入の工夫

6. 学習過程における即時評価

・評価の観点

・評価の方法

・実践例 (別紙)

<問題提起>

・先行経験が充分生かされないため、探求心のおきない子ども
また、探求心は誘発されてもそれが持続しない子どもにとっては
小集団による話し合いや実験・観察は何の意味もなさない。こ
れらの子どもに対する手だてとしては、どのような方法が有効
であるのか。

・子どもの学習意欲を高めるための自己評価をどのようにすればいいのか。

相互作用を生かした学習指導の研究

— 課題と評価について —

春日井市立高座小学校

1. はじめに

本校では過去二年間にわたり課題と評価について実践的な研究を進めてきた。

一昨年は課題と評価に重点を置いたバズ学習全般にわたる基本的なことから研究といえるものであった。

昨年はその成果を積み上げるために、よりよい課題の設定とそれともなう学習過程の評価のあり方の研究を行なった。

研究が進み、少しずつ深められてくるといろいろな問題がでてきた。それらの問題点を明確にし、追求しながら研究をさらに深めていくために、本年度も標記のような研究主題を設定し、全職員が一致して、取り組んでいる。

2. 仮説と具体的な進め方

(1) 仮説

研究テーマの追求を通して、次のようなことの達成をねらっている。

- (ア) 児童の学習活動への参加度を高め、自己実現の場を与える。
- (イ) 学習内容の理解を促進し、さらに深化拡充ができる。
- (ウ) 課題の追求のための教材研究が、教材の精選につながっていく。

(ニ) 教師の児童に対する評価と、児童の自己評価が容易にできる。

(ホ) 認知目標と、態度目標を同時に達成することができる。

(ヘ) 学習の効率化が可能である。

(ニ) 児童のよい人間関係がづくりあげられる。

(ウ) 全職員の協力により、学校教育体制が、確立される。

(2) 具体的な進め方

研究活動をすすめる基本的な姿勢は、次のとおりである。

(ア) 毎週1回月曜日か木曜日に可能なかぎり現職教育を行ない、毎日の実践を通して研究したことについて全体で協議する。

・協議にあたっては、柱立てをしっかりと話し合い、問題点を追求する。

・全職員が三つの班に分かれ、積極的に協議に参加する。

(イ) 現職教育では、授業研究、実践報告の検討、理論研究などを行なう。

授業研究の観点は課題と評価に焦点を合わせて次のようにしている。

・課題提示前の指導は適切であったか。

・課題は適切であったか。

・課題に対する児童のとりくみのようすはどうか。

・課題後の指導は適切であったか。

- ・教師の評価は適切になされたか。
- ・評価後の教師の指導や、次の課題に対する事前指導は適切であったか。
- ・児童の自己評価や、相互評価は適切になされていたか。
- ・学習の訓練はよくできていたか。

なお、授業研究の協議では、授業者に対して思ったことはそのままかざらないでどしどし発言している。そして授業者は自分の悪いところを反省することにより成長していくことを、お互いに確認し合っている。

- (ウ)全職員が年に1回以上の公開研究授業をし、研究主題に基づく実践上の問題について協議する。
- (エ)学級集団の成長と個人の向上をめざして各教科ばかりでなく、道徳、特別活動、生活指導のすべての分野にわたり、研究の対象にする。
- (オ)現職教育委員会を構成し、研究推進のための方向づけをしたり、問題提起をしたりする。
- (カ)研究協議や授業実践等の記録を累積し、それを通して研究上の問題点と今後の研究の方向を明らかにしていく。

3. 研究内容

(1)目標と課題

授業で子どもたちが現在どんなことを学習しているのか、これから何に取り組もうとしているのか、という意識が常になれば、教師の一方的な指導に終わってしまい、決してよい授業にはならないだろう。

だから、課題は授業が成り立つために不可欠のものであるといえる。

課題は授業を進めるもとになる力であり、学習活動を組織化する重要な役割りを果たしているのである。

このような働きをする課題は、常に授業の目標に即したものでなくてはならない。

そして課題を解決することにより学習目標が達成されるのである。

(2)課題の条件

授業を組み立てる柱ともいえる重要な課題はどんな条件を備えていなければならないだろうか。

- (ア)学習目標を達成するための思考を子どもたちに生み出させ、技能を習得させるようなもの。
- (イ)単元や題材全体の見通しの上に立って、系統性を持ち、位置づけのはっきりしているもの。
- (ウ)すぐに答の出るようなものでなく、適度な困難さがあり、解くのに抵抗があるようなもの。
- (エ)子どもたちがとりつきやすく、努力すれば解けるもの。
- (オ)子どもたちの興味や関心を高め、取り組もうとする意欲をもたせるもの。
- (カ)思考を深めるもの。
- (キ)高度な段階へ発展性のあるもの。

以上課題のもつべき条件をあげたが、もちろんこれらのすべての条件を満たさなければならないというのではない。

指導目標、教師の教材観、児童の実態の関連の中からその授業に適した課題は設定されるべきである。

活発な話し合いがなされた課題がすべてよい課題であるとはかぎらないが、実際の授業でどういう課題を与えられたときに子どもたちが進んで取り組んだか例をあげてみよう。

- ・具体的で、何をやったらよいかよくわかるもの。
- ・子どもたちの生活経験に基づいたもの。
- ・確認的なもの。
- ・子どもの興味をひくもの。
- ・事前指導がしっかりなされた後のもの。
- ・グラフや絵などの資料が使われた場合。
- ・カードを使って動的に視覚に訴えたもの。
- ・ゲーム化されたもの。

よい課題とはどんな条件をもったものであるか。理論は理解できても、実際に設定するとなると容易ではない。

日々の実践の中で、試行錯誤を繰り返しながら努力していくうちに、だんだんと適切な課題が提示できるようになってきている。

(3) 授業の組み立てと課題

1時間の授業を組み立てるとき、大きく三つの過程に分けて考える。

そして、準備過程、中心過程、確認過程のそれぞれの過程に合った課題を設定して授業を進めていく。

(ア) 準備過程の課題

- 中心課題を解決するための基礎的なことから、それに必要な既習事項で組み立てる。
- 大きな課題ではなく、分節課題がいくつか提示されることもある。
- 前時に準備課題になるものが提示される場合がある。

(イ) 中心過程の課題

- 本時の学習目標が達成できるように設定された中心的な課題である。
- 思考を深め、学習内容がまとめられるように、あまり数を多く出したり、分節化しないほうがよい。

(ウ) 確認過程の課題

- 本時の学習内容の理解度が確認され、まとめができるような課題が必要である。
- 次時の学習につながるような課題も確認課題である。

授業の流れを考えて、それぞれの過程に合った課題が提示されなければならない。

1つの課題が解決され、次の課題が提示されるまでに、次のようなステップをふんでいる。



相互活動

↓

評価

↓

事後指導

子どもたちが積動的に課題に取り組もうとするかどうかは、課題そのもののいかんによることは当然であるが、提示前の指導によって大きく左右されることも事実である。したがってわたしたちは、事前指導で次のようなことを行なっている。

- 課題解決のための手がかりを与える。
- 興味関心をよびおこす。
- 問題意識をもたせる。

適切な事前指導は必要であるのだが、課題の内容までくわしく教えてしまうことはよいことではない。というのは子どもたちはよくわかっていると、深く追求しようとしなない場合が見うけられるからである。

確認的な課題は提示後すぐに相互活動を始めることがある。

しかしそうでない課題が提示された時には、まず自分でやってみる、という指導を常に行なっている。それから班の中での話し合い、学級全体の話し合いになっていくのである。

思考を深めさせるような課題では、班と班の意見がぶつかり合い、追求していく形になるように指導している。

発表の後には、必ず評価がなされている。そして最後に事後指導として、教師が補足、修正をしてまとめ、次の課題の事前指導というサイクルになっている。

(4) 実践例

2年 算数

単元 1,000までのかず

過程	学習活動	指導上の留意点	評価
中	<ul style="list-style-type: none"> 教師の話聞き題意をつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> 百円玉でねだんの示してあるずかんと、どうわの本の2枚の絵を黒板にはり、問題場面をつかませる。 	
心	<ul style="list-style-type: none"> 自分で考える ・$400 + 200 = 600$ 	<ul style="list-style-type: none"> まず自分でやらせる。 わからなければ100円の模型を使わせる。 どんな式でいくらになるか考えさせる。 	
過	<ul style="list-style-type: none"> 班で話し合う。 発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 式や答のでてくる理由を班で話し合わせる。 加法の場面であることを認めさせる。 式と答を板書する。 	<ul style="list-style-type: none"> $400 + 200$の式がたてられ立式の理由がわかったか。(自由会話法)
程	<ul style="list-style-type: none"> 隣りと確かめる。 式と答をノートに書く。 	<ul style="list-style-type: none"> となりと加法になるわけと答を話し合わせる。 板書した式と答をノートに書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> $400 + 200$の暗算が正しくでき加法になるわけがわかったか。(隣接法)

400円のずかんと200円のどうわの本をかいました。あわせてなん円になるか、考えなさい。

4年 社会

単元 山地と平地

過程	学習の内容	指導上の留意点	評価
中	<ul style="list-style-type: none"> 大都市や多くの都市が平地に多いわけを考えなさい。 		
心	<ul style="list-style-type: none"> まず自分で考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 名古屋、東京、大阪などの大都市を例にして、日本全国 	
過	<ul style="list-style-type: none"> 班で話し合う。 全体に発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 掛図を見て考えるよう指示する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大都市や多くの都市に平地が多いわけが理解できたか。(自由会話法発表)
程	<ul style="list-style-type: none"> 板書をうつす。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表をもとに板書しまとめる。 理解のわるいときは板書しまとめる。 	

特殊学級 音楽

単元 かっこう

過程	学習活動	指導上の留意点	評価
確	<ul style="list-style-type: none"> 「かっこう」の歌を本をみないで歌いなさい。また階名唱をしなさい。 		
認	<ul style="list-style-type: none"> 班の子みんなできるようがんばる。 	<ul style="list-style-type: none"> 今までにまだできない子を中心に班の子で励まして練習させる。 	
過	<ul style="list-style-type: none"> 評価表を用いできるようになったものに○をつけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> できない児童は程度に応じて△や×を記入し、できるようになったら○にかえるのだということを知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> きょうの学習をしっかりがんばったか。(挙手)

(5) 評価の実践

学習目標を具体化した課題が提示され、それが核となって授業が進められていくのであるが課題に取り組んだあとでは、必ず評価がなされなければならない。

目標→課題→評価 という順で目標がどの程度達成されたかを知り、それが次の目標につながっていくのである。

学習活動の中で即時評価をすることにより、次のような成果が期待できる。

- 子どもたちが、どの程度理解したかをつかむことができる。
- 目標への到達度を知ることができる。
- これから努力する方向をつかませることができる。
- 学習のまとめができる。
- 学習意欲が高められる。
- 教師自身の反省ができる。

(6) 評価の方法

準備、中心、確認のそれぞれの学習過程では、さまざまな評価がなされている。わたしたちは、次のような方法を授業の流れや、課題の内容に合わせて用いている。

- 挙手をさせる。
 - 相互活動をさせる。
 - 隣接法、対人法、輪番法、自由会話法。
 - 発表させる。
 - プリテスト、ポストテストをさせる。
 - 小テストをやらせる。
 - 机間巡視をする。
 - プリントに書かせる。
 - ノートさせる。
 - 読ませる。
 - 動作をさせる。
 - 自己評価表に記入させる。
 - 評価テストをさせる。
 - 反応器を使わせる。
- 以上のほかに、是認と否認、観察なども評価と考えられるだろう。

(4) 課題と相互活動の方法

話し合いも評価の一方法であるが、課題の内容に合った相互活動が大事である。

確認的な課題には、隣接法や対人法が適しており、思考を深めたり、さまざまな意見が出ると思われる課題には、自由会話法や輪番法がいいのではないかと考えられる。

(5) 評価する際の留意点

- 評価を目標との関係でとらえていく。
- 課題の内容に合った評価方法を考える。
- 認知面だけでなく、常に態度面での評価もする。
- 自己評価をさせる場合は、あいまいにならないように、教師が基準をしっかりと示すこと。

(6) 評価の実践例

4年 算数の自己評価表

単元	かけ算とわり算		目標	かけ算の筆算ができるようになる。			
	月/日	やったこと		理解	発表したか	よく聞いたか	楽しく学習できたか
1	6/16	135×143	◎	○	○	×	
2	6/17	316×807 3500×270	○	○	×	○	

- ◎○×の段階で記入する。
- 認知面だけでなく、聞く態度、発表など態度面の自己評価もさせている。

6年 理科の自己評価表

単元	月日	目標	自己評価
木による 季変化	9.13	• 班で協力して観察できる • 葉の落ちる木と落ちない木の育ち方のちがいが言える。	△ ○

- 行動目標をとり入れて、評価基準がはっきりするようにした

認知目標	㉠さか上がりで上がってうで立て後転ができるようにする。 ㉡前転と後転をこうごうに連続してできるようにする。 -----
班	・まっている間のたいどをよくしよう。 ・できない子に協力しよう。

①	小島洋二	②	奥村まり	③	平野宏和
	-----		-----		-----

種目	課題	月日	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
㉠	1.さかあがり	6	○	○	○	○	○	○	○	○
	2.れんぞくさかあがり	20	○	○	○	△	○	△	○	○

班の活動	6/20	○	はじめての班だけどしっかりできた。	みんな協力しあってよくできた。
	6/21	○	はんで協力してできた。	うまくできない人をみんなで教えた。

種目	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
㉠	○	○	○	○	○	○	○	○

感想	・うでを上げることがなかなかできない。 ・足を上にあげる時くびをできるだけ前におるようにするといいかも知れない。 ・できない子もできるようになった。
----	--

- ・いろいろな項目に分けて評価している。
- ・個人の評価だけでなく、班の評価もさせている。

5年 算数のプリテスト

まさ子さんの家の7月から10月までの水道の使用量は下のようでした。

各月の使用量を同じになるようにならすと1か月について何 m^3 使ったことになるでしょう。

水道の使用量

月	7	8	9	10
量(m^3)	66	60	56	54

実践を積み重ねていけばいくほど、問題点も多くでているのが現状であって、なかなかまとまるところまでは行かない。しかし、毎日の実践を通しての研究活動の中から、少しずつではあるが次のような成果があがってきているように思う。

- ・常によい課題を考えることにより、教材研究が深められている。
- ・課題の追求により、授業の組み立てが、しっかりでき、それが指導内容の精選にもつながってきている。
- ・即時評価をすることにより、児童の理解度がつかめ、次の課題や活動の指示が的確にできるようになった。

以上教師側からの成果を述べたが、一方児童側は、

- ・学習への参加度が高まり、理解が促進されるようになった。
- ・目標をもって意欲的に取り組もうとする姿勢が見られるようになった。
- ・評価をすることによって、自分のつまづきがわかり、努力する方向を知ることができるようになった。

4. おわりに

課題と評価について、毎日の実践を基に研究を進めているが、まだ途上であり、やることが多くある。

これまでの実践にさらに積み重ねをし、研究を深めるために、今後は次のことに力を入れていきたい。

- ・常に適切な課題が提示できるように、さらに課題についての研究を続ける。
- ・目標、課題との関連から、よりよい評価方法のあり方を追求していきたい。

第12回全国バス学習研究集会

人間関係によって学力をどう促進したか

竜野市立小宮小学校 黒田紀子

< 研究テーマとその要旨 >

人間関係を高めることが学力を促進する。これがバスの基本とされている。実際にそうであるのか。班の中での人間関係によって、同じような力を持っている児童でも違いが出てくるであろうか。このことをテーマに算数の正比例の授業を通して考えてみた。課題、それに対する評価をふまえながら、2つの班を取り上げ、その班の中における個人の学力がどれだけ伸び、反対に伸び悩んでいるか明らかにしてみたり。そこから人間関係と学力について何らかの接点が見い出せたら一歩前進であると思っている。

< 研究経過の概要 >

正比例の授業過程

- ① 事前テストの実施 … 教科書下のP20から進めのため、予習による既習知識は少なく、正比例という言葉に対しても未知。平均60点。
- ② 学習課題の設定 … 課題 1. ともなつて変わる量の関係を調べよう。
2. 正比例の関係を x , y を使って式に表そう。
3. $y = 2 \times x$ のグラフを書いてみよう。
4. グラフの書き方を練習してみよう。
5. 練習問題をしよう。
- ③ 自己評価 … 授業の後、簡単な自己評価。内容は今日の学習についての理解度、課題についての予習、家での復習について尋ねたもの。教師の反省材料として又児童の意識づけをねらいとして試みた。
- ④ 中間に復習テスト … 教科書内容程度。平均94点
- ⑤ 事後テストの実施 … 事前テストと同じ問題 平均94点
- ⑥ 正比例の学習の感想を書く。

2つの班 (2班と5班) の比較

事前テストで最低点の15点が2人いた。Mは2班、Kは5班である。

2班におけるM

(2班の事前平均71点、事後99点)

Mは算数の基礎学力が6年としては不十分であったが、班内ではリーダーを中心に親切に援助し、 $y=3x+2$ の式でyの値が13.5のときのxの値の出し方でつまづいているときは簡単な数で考えさせたり、わからないことを放っておいたり、Mの思考をじゃまするような雰囲気はなく、常にMの動きを見守り、表裏も自信を持ってしていた。

家でも自分なりの復習をやっていた。

M 事前15点 事後75点

(36人中一番進歩が高い)

5班におけるK

(5班の事前平均49点、事後85点)

KはMと同様、基礎学力に欠けている問題にあっても自分でやってみようという意欲に欠け、わからないかおからなりの態度もはっきりしない。

リーダーは援助し、話が班内の話し合いがあまりまとまらず、課題に対して真剣に取り組めず、わからないのに、「いいかげんにやませよう」と児童がいるため、理解が不徹底のままテストを終えている。

K 事前15点 事後44点

(36人中一番悪い)

以上のことから、2班の方が平均してよく理解できる児童がいることは確かであるが、2班のMと5班のK個人の学力は殆んど同じなのである。(事前テストより)しかし事後において、75点と44点という大きな差が生じたことも事実である。人間関係と学力とが無縁ではないということであろう。Mがこれだけ伸びた背景に、Mをわからずのまま放っておかない班の協力姿勢、又みんなの支え、答えよとするMの意欲が大きくものをいっているのではなからうか。仲間づくり、集団づくり、学習に意欲を持つ児童を育てるためにも、人間関係を高める手だては忘れてはならない。

しかし、学習はあくまで個人に始り個人に終わるものであり、個人の能力を上げるためには個人の学習が重要視されてくるであろう。いくら話し合いがうまくても、本当に力がつかない限り、本物の学習ではないと思う。そういう意味で家庭学習のあり方と必ず学習との位置づけが問題になるところ、やはり復習することにより、自分の身につく学習になることは当然のことなのである。今後の課題として考えようと思っている。

< 問題提起 > < 討論を希望する問題 >

1. 家庭学習とテスト学習とはどう位置づけられるか、学力と家庭学習との関係はどうか。

第12回 全国バス学習研究集会

国語科における 効果的なバス学習のあり方

姫路市立城北小学校 今井猛俊

1. 国語科教育の本質と本校の取り組み

(1) 国語科で育てる能力

統合的言語能力 < 外的機能(伝達) — 理解(読む・聞く)・表現(書く・話す)
内的機能(認識) — 思考(認知・情動)・意欲(倫理性・自律性)

(2) 本校の国語学習

大西久一氏提唱による「たどり読み指導を通して、豊かな表現力を育てよう」というもの。「たどり読み」とは、「文章は時間的、継起的に展開するものである」という時枝氏の論に基づいた、1回勝負のきめ細かな読み取り方である。

(ア) たどり読みの指導過程

題目読み → 冒頭読み → 展開読み → 終末読み

(イ) 1時間内の実践操作

屈折読み → ひろげ読み → まとめ読み → 予見読み

2. たどり読み学習の問題点

個人思考(書き込み) → 1斉学習(発表・討議) という学習形態をとるため、ともすれば1部の発表の済みに終始し、自分の読みに自信のない子どもはいつまでも全体の前に出せないでいる。

3. 小集団学習を軸とした言語学習

上述の「たどり読み学習」の反省にたって、教授=学習過程における次のような仮説を立て、実践に入った。

互いに認めあう雰囲気の中で、個人学習活動、バス学習活動を順にふまえた1人の読みとりは、意欲的に全員の前に出しあい、高のあうことができる。

この仮説に基づいた実践にさきだち、次の2点に意を注いだ。

(1) 支持的風土を培う。読破的な小集団作り

- ・リーダー公選、自主編成によるグループ作り
- ・グループロジ、反省日記
- ・発表カレンダー
- ・グループ内の1人を大抜にする発表のきまり

(2) バス学習を軸とした国語科指導法の改造

〈 個人 - バス - 1巻 のサイクルによる たどり読み の指導過程 〉

		学 習 の 流 れ			
具体的活動	非文学教材	はちどまりを考える (どこ書かれている事柄がわかっているか)	ひらける (意見・自らの生活経験 具体例 など)	まとめる (文脈に即して まとめる)	予見する (次回はどんな事が 述べられているか)
	文学教材	どこで語がかわっているか	(場面・気持ち・性格 イメージなど)	(文脈に即して まとめる)	(この次はどんな お話になると思いか)
学習形態	1巻				
	個人				
学習の実践操作とバスの機能	屈折操作 (確かめあい)	拡散操作 (広げあい、認めあい)	収束操作 (高めあい)	予見操作 (広げあい)	
備考	個人発表 全体討議	メモ用紙に書く 全体討議	メモ用紙に書く 全体討議	カードにまとめる 発表表 全体討議	

4. 実践の過程と子どもの変容

(1) 実践の過程

5年 国語「光村」 6月～7月 読解文「スミと人間」、『動物の体内時計』
 3単元で 実践 9月 物語文「野ばら」
 * 学習展開事例は頁数の都合で省略

(2) 子どもの変容

- おくれた子どもをかえるA班に全員参加が...
- まちがた発音に対する支持的関心の芽生
- 国語学習への意欲向上
- 挙手、発言の 数と質の高まり

5. 問題点

- (1) 1単元に問数が多くかかりすぎる。全員参加を前提に、指導の精選・重点化を希求する。
- (2) 小集団の構成員によっては、支配-服従関係に似たバスがなくならず、1人1人の意欲機に結びついてこない班ができること。—— 班編成のしつた ——
- (3) 1時限の指導を高める為の、生活=学習のバスが大切で、全領域での知的、能力的、感情的な経験活動が必要であること。

第12回全国バズ学習研究集会

学力保障をめざす授業改造

—— 学習の見通しと、自己評価を可能にする課題学習の展開 ——

姫路市立旭陽小学校

〈研究テーマとその要旨〉

学力の定着を図るため、授業においては主体性の原理と刺激助長の原理に立ち、特に個々の児童に、到達目標の明確な意識化と、達成動機に支えられた質の高い学習課題の設定並びに学習過程における個別化と集団化の促進、達成度評価の具体的手だてを追求するなかで、研究テーマにあげた「学習の見通しと、自己評価を可能にする課題学習」の展開が、授業効果に大きく期待できるという仮説のもとにその研究と実践を試みている。

〈研究経過の概要〉

仮説に基づき、その授業のシステム化への研究と実践について次の経過を迫ってきた。

I 前年度（昭和51年度）の研究と実践

1. 教師の授業観の統合—— 授業改造への基本的な考え方の共通理解

○ 学習主体は児童である。教師中心から児童中心の授業へ

教える授業から、自ら学びとる授業の手だて

○ 結果主義から過程重視の授業へ

認知獲得と態度形成過程における望ましい経験獲得への事態状況の構成

2. 授業の構造化への視点と、それらの具体条件の探究

○ 目標達成行動の成起する学習課題の性質と、その設定の手順

○ 学習課題への取りくみの過程における望ましい経験の組織化

○ 目標達成過程における評価の手だて

II 本年度（昭和52年度）の研究経過

本年度は、前年度の反省に基づき授業の質を高めるため若干の修正と補足を加えた。

1. 仮説の修正

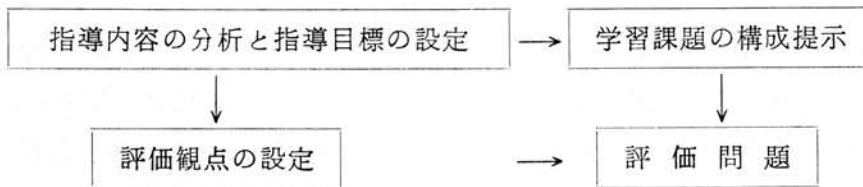
前年度においては、児童の取りくむべき学習課題を授業毎に提示したが、本年度は一単元全体についての学習課題表を作成し、その単元の学習に入る最初の時間に提示することにした。これは児童に、単元全体の学習の意識化と、見通しをたて学習メデ

ィアの活用による計画的自主学習の促進並びに自己活動過程を中軸とする集団相互作用過程の促進、達成状況の具体的把握等をめざすもので、そこから“学習の見通しと自己評価を可能にする課題学習が授業効果を高める。”という仮説を立て、その研究と実践に取り組んでいる。

(学習課題表の形式)

単元	学習のめあて(評価観点)	時	学習課題(評価問題)	反省
	(児童にわかるように具体的に示す)		(学習のめあてを具体化した学習課題)	(困難点や疑問点等)をかく

2. 学習課題の構成と評価の関係



目標達成状況の評価については、次のように行っている。

1. 単元(小単元)全体の学習課題(評価問題)の作成
2. 学習課題(評価問題)によるプリテストの実施
3. 学習課題の取り組みの過程における自己評価・相互評価・教師による評価
4. 学習課題(評価問題)と同種・等価の評価問題によるポストテストの実施

<問題提起>

1. 学習課題について

授業過程の原動力・推進力となる質の高い学習課題は、教師の教材研究の深さに比例するといわれ、教師が構成提示するものであるという考え方に対し、学習課題は児童が(教師の指導により)発見すべきものであるという考え方がある。

- (1) この場合、同じ学習課題というコトバを用いても、本質的に異なるのではないか。
- (2) 学習課題は、児童が発見すべきもの、児童が捉えるべきもの、という考え方を基底におくのは、どんなメリットを期待しているのか。果たして学習の自主化主体化の上に、また動機づけの上に、そして学習効果の上にどれだけ期待し得るのか。またこれが発見的学習とでも言えるのだろうか。

2. 評価について

- (1) 態度過程についての評価の観点をどう捉えたらよいか。(現在本校では、学習に対する興味関心・理解度・授業への積極的参加・仲間への態度を評価の観点としている。)

第12回全国バズ学習研究集会

評価を生かした指導のあり方

—— 英語科における実践をとおして ——

愛知県春日井市立東部中学校

1. はじめに

昨年度、「学級経営はよい授業の土台である。」このような目標をたて全校的に体制をかため、研究をすすめてきた。本年度は更にこれを深め、学級経営や各教科の指導においても、評価を生かした指導のあり方を追求することにした。紙面の都合上、本年度は英語科の実践に絞って問題を提起したい。

英語科に絞ったといっても、勿論、学習指導は単に教科の指導のみにあるのではなく、学校全体の中にあつて、学級経営、すなわち学級での指導が基盤となつてすすめられなければ、その効果はあがらないと思う。又、個々の教師がそれぞれの考えで指導をすすめても、学習効果はあがらないであろう。

指導にあたっては、学校ぐるみで指導形態を考え、その中で課題と評価を追求することにより、わかりやすい授業、わからせる授業の実践をすすめた。英語科に限らず本校では、一昨年からの「課題と評価」の研究の上に立って、「評価と事後指導」のあり方について研究に取り組んでいる。

2. 研究経過

学校体制の中で、英語科においても、一昨年は、1時間の授業の流れ（準備過程・中心過程・確認過程）において適切な課題を生徒に与え、課題に対する即時評価のこころみをした。昨年は、学級経営のみなおしをしながら課題と評価の研究をおすすめ、本年は更に、評価活動をとおして事後指導の手立てに

ついて実践をすすめている。

英語科では、1時間の授業の流れの中で、

- 課題の提示の仕方。
- 課題の内容が適切かどうか。
- 課題に対する評価の仕方。

など最初のクラスの授業後に、課題と評価授業の組み立て等について検討を加え、指導案を改善し次のクラスの授業へ臨む、これによって、よりよい課題と評価の追求ができ、それを蓄積することによって次の指導の手立てを考えるようにしている。

(1) 事後指導の実践例

ア 学習指導案をもとに指導の結果を検討し、次時の指導案の内容を改善・充実させる。

イ 毎時間英語の単語（文）の小テストをすることによって理解度をテストし評価した後、誤答や書けなわった生徒については、短学活を利用し、班で教え合いをさせ、ノートに再度正答を書くようにしている。単元テストや中間・期末テストについても同様であるが、指導の時間は単元の時間数をきりつめ1時間をとっている。

ウ 毎時間の授業の事後指導については、朝・帰りの短学活を活用して、生徒自ら班ごとに教科の疑問点、わからなかった点を出し合い解決するよう指導している。生徒自身で解決できない場合は、教師も援助したり、教科の先生の援助を受けた

りしている。

(2) 態度評価のこゝろみ

1時間の授業の始業と同時にプリントによって態度目標の確認をさせ、帰りの短学活に点検させた。このこゝろみも、評価項目の検討や実施について全校的に拡大したいと思う。

〔試み例〕

- チャイムで開始できたか。
- この時間の学習にまじめに参加できたか。
- 自分から進んで学習のめあてや課題を見つけることができたか。
- わからないところは積極的に先生や友達に質問し、解決しようとしたか。
- 大切なことは見のがさず記録し、ノート工夫をしたか。
- 学習に必要な用具などを忘れていなかったか。
- 班や友達と協力したり、励まし合って学習に取り組んだか。

(3) 事後指導をすゝめていく過程での問題点

- ア 一年生1学期のバズ学習導入期における授業の組み立をどのようにするか。
- イ クラスによって課題をかえることは全時間できにくい。
- ウ 課題の提示の仕方が決ってしまう。
- エ 生徒の進度差が大きい。
- オ 課題のよし悪しをどのように評価したらよいか。
- カ 下位の生徒に対する事後指導を、授業を通して具体的にどうしたらよいか。
- キ 指導案の蓄積をどのようにしたら効率的に活用できるか。
- ク 個々の生徒について指導をする時間的な余裕をどこでみつけるか。

(4) 事後指導をすゝめる中で把握できたこと

- ア 学力差における課題の提示について段階的に組み立てることが必要であると考えられる。
- イ 学習での理解度の弱い点などを把握できる。

ウ 生徒自身、短学活で自主的に取り組めるように目標をつかむことができるようになる。

エ 学校と家庭との学習のサイクル化の必要を生徒自身意識してきている。

3. 問題提起

- (1) 授業の流れにおける形成的評価と診断的評価・総括的評価をどのようにすゝめていったらよいか。
- (2) 個人内評価の指導をどのようにすゝめたらよいか。
- (3) 認知面の評価だけでなく、態度面の評価をするうえで、今後どのように指導したらよいか。
- (4) 学習に対する評価をした後、さらにそれを発展させるような指導をするにはどうしたらよいか。
- (5) 英語科における4技能の評価と事後指導を現在の英語教育の中で、どのようにしたらよいか。

4. 討論を希望する問題

- (1) 課題のよし悪しについてどのように考えたらよいか。
- (2) 事後指導の方法について、具体的な方策を教えていただきたい。
- (3) 学級経営と教科指導のかゝわりについて。
- (4) 認知面の評価と態度面の評価をどのように考えすゝめたらよいか。

5. おわりに

教科における学習指導の研究は、基本的なことがらについては、全校共通理解のもとにすゝめているが、教科ごとにすゝめている学習指導案の改善・蓄積による研究の深まりについては、更に共通なものに高める必要がある。

短学活や生活指導等についても、それぞれの場においてすゝめられているが、学習指導の場においても常に心がけ、指導の統合化をはかりたい。

全国バズ学習研究大会

自主・協同・創造の能力態度を高める
学習活動づくり

広島県 豊田郡 豊町立 豊中学校

賀戸 文夫

1. はじめに.

私達も8年前ごろより、民主的な人格の形成に即応する学習活動のあり方を、「認知的形成」と、それを支える「態度的形成」が、相乗しながら作用しうる学習活動のありかたを、バズ学習に求めてきた。しかしながら、人事の交番のあるなかでは、校内自体の中においても、バズ学習は、小集団で、バズらせる事を一時間のどこかで取り入れる、よくいわれる「ワイワイ、ガヤガヤ」式という把握にとどまっている事も多い。他校を交じえた授業研究などでは、「生徒の活発さ」の一応の評価はあるものの、「あれでは、効率は悪いのでは？」という疑念での発問や、質問もなげ出されるのである。

2. バズ学習は、技法でなく、方策でありたい。

そこで、私達は、教育目標の中心に「一つ一つ、一步一步、可能性に近づく、幸せな生涯づくりを、科学的なす

じ道をたどつて、作り出すために、「自主・協同・創造の能力・態度の育成」をめざす方策としての学習活動づくりを志向している。

3. 学習活動づくりの全体計画構想

まず私達は、学習するという行動の目標に、「個体が、よりよい自己実現を目指して、物の見方、考え方、行い方の変容に向う努力的経験であり、それを通して、人間性に満ちた感性に至る持続的意識的行動を求める」事におく。その実現のために、「自主・協同・創造の能力・態度を高める」教育課題（ことに、地域の教育課題）にせまる教育活動づくりを、「課題づくり」－「解決活動づくり」－「評価づくり」－「地域づくり」の流れの中で、具体的・実践的に追い求める。

そこで、「家では」「学校では（教科、教科外）」「地域では」、これこれという視点を画し、いつれの場においても、絶えず、前記の目標に向う

学習活動づくりを試行する。

そこで、家庭では、「活動の準備をしつかり整える、即ち、意欲、情緒、生活行動様式、健康、体力の具合のよさを充分にする」ことに自主的に、創意的に、協同的活動を促進し、学校では、「学習活動の基本的とうやの場として、重点的集中的計画的に一貫性をもつて、次の様に、学習活動づくりを、

0なにを、個人は、	出すか (準備)
0みんなで、なにを	
0なにをするかはつきりする (課題把握)	

0 くだきあう。	
0 えらびあう。	練り合う (解決活動)
0 つなぎあう。	
0 説明しあう。	
0 確かめる。	まとめ
0 認める。	納得しあう (確認)
0 喜ぶ	

教科外活動 (30分学活)

0 出しあう。	
0 練りあう。	たかめあう (強化)
0 深めあう。	
0 練りかえす。	

地域活動 (地域学習会)

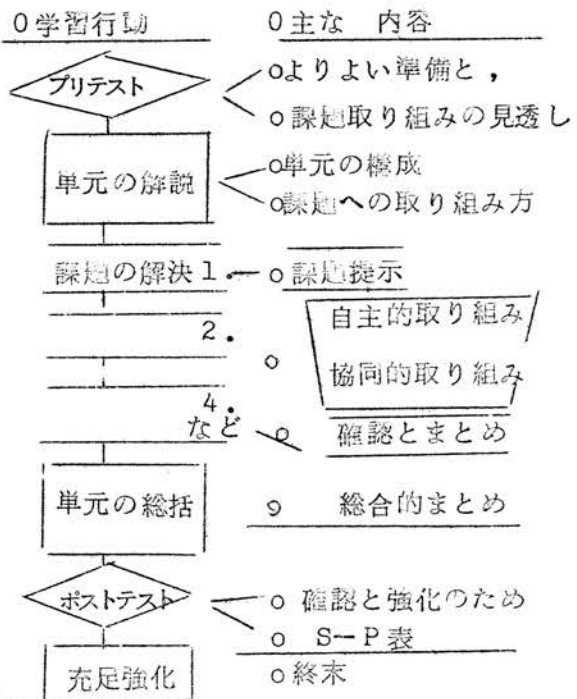
0 地域で集まる。
0 地域で語ろう。 (C.P.T.)
0 地域課題をもつ。(幼・小・中・高)

地域づくりの教育の一貫性を求め試行。

4. 「こま切れの活動」を克服したい。

そのために、「単元単位で、自主○協同○創造の能力・態度の育成を充実する学習活動」の計画実践へ。

今度の、第4次の学習指導要領の改定といわれる「精選と、ゆとりとある学習」が打ち出される事を待つまでもなく、私達は、自主○協同○創造の能力・態度を高めるべく、「生徒達が、ゆとりと、はばのある思考活動の出来る」学習活動づくりの歩みを進めて来たつもりではあつたが、とかく時間単位のこま切れに終止になりがちであつた。そこで次の様な単元単位での自主○協同○創造の学習活動計画をもとに再試行する。



問題点と課題

(完)

機器を利用したバズ学習

姫路市立琴陵中学校

原 田 守

1. 研究テーマとその要旨

本校本年度の教科指導における研究テーマは、昨年までの研究実践の跡を反省検討し、更に市教委の主要努力目標を勘案して、研究推進委員会が原案作成、全職員の共通理解とその徹底を期すために職員会議で検討の上、下記のように決定した。

「ひとりひとりの力を伸ばす学習指導法」
— 教育機器の活用とバズ学習を通して —

如何に社会構造が複雑になり、価値観が多様化し、学校のなすべきことが多岐になろうとも、学校教育の目的は全人的な人間の育成であり、その中核をなすものは授業である。

本校ではここ数年授業の最適化をめざしてバズ学習と教育機器をいかに効果的に位置づけるか、即ち授業のシステム化の研究を積み重ねて来た。本年度は過去の研究成果を如何に生徒に還元し、定着深化していくかが課題であり、研究推進委員が中心となって、全職員が研究実践にとりくんでいる。

2. 研究経過の概要

本校がバズ学習をとり入れてから6年半(S46.4)、教育機器の研究をはじめから4年半(S48.4)の歳月が流れ、1昨年(S50.11)「教育機器とバズ学習を有効に位置づけた授業のシステム化をめざして」と

いうテーマのもとに教育工学の研究発表をする機会を得た。それを機に全職員が系統的的手法を授業実践に応用しようとする機運が高まり現在に至っている。

(1)研究内容(教科におけるバズ関係分のみ)

- 学年当初におけるバズ学習に対する教師の再認識と生徒の基本的理解をどうするか。
- 生徒の発達段階に応じたバズ学習のあり方
- 教科の特性に応じたバズ学習の研究
- 授業における態度目標の明確化

(2)研究組織、研究方法は略(口頭説明)

(3)本年度実施状況(11月以降の予定略)

4月:バズ学習の基本的理解を全教師にプリントし配布

新転任教師研修会(教育工学とバズ学習、機器の取扱、資料の整理等)

5月:教育機器操作技術講習会(VTR、OHP、16mm、ミニライザー等)

6月:教科別研修会(研究授業者6名)

7月:指導案のつくり方研修(従来のとフローチャート)…市教委瀬良主事

8月:個人研修レポート作成

9月:小集団学習研修…市研究所吉田主事

10月:教科別研修会(研究授業者5名)

3. 問題提起

授業に機器を活用することの有効性、バズ

学習の必要性については今更論ずるまでもない。問題はこれらをどこでどう位置づけ、組合せ、組織化するかである。勿論各教科の特色、教材の内容、生徒の実態等によって異なり、画一的に決定できるものでもなければ、すべきでもない。また授業の手法としてこの2つだけが万能であるといっているのでもない。しかし現在授業の改善を考える時に、常にこの両者を念頭において、意図的によりよい授業を創造設計する必要性を強調しているのである。以下校内研修中での先生方の意見の一部を述べてみる。

- バズをする前に、与える課題、討議する資料等に提示機器（OHP、VTR、スライド等）を利用すると話し合いが活発になる。
- 研究の方法や実験の結果における種々の思考を、各班でバズをした後、その意見のまとめをTPに書き提示すれば、時間が短縮され、多くの意見を聞いたり、その意見について考察する余裕が生じる。
- 数学等で机間巡視中に生徒の問題解決過程における誤りを発見したとき、そのノートをすぐにトアペンアップでとるかTPに書いてスクリーンに映し、それによってバズをすると効果的である。……誤答こそ宝
- 課題提出（提示機器）—個人思考—バズ意見発表（OHP）—教師のまとめやおさえ（TP、VTR、スライド等）のパターンが効果的である。
- 内容にもよるとおもうが、一般的にどんな場面でどんな機器を使い、どんな場合にどんな方式のバズをとり入れたら効果的か、もう少し具体的なことが知りたい。

○機器やバズを取り入れることにより、板書が粗末になったり、ノートの存在的意義がうすれ、主体的な学習が一部の生徒になりやすい事は、教師が常に留意すべきことである。

○バズを下手に取り入れると、個々の能力に応じた学習指導が、ともすれば生徒まかせになりがちになるきらいが生ずる。

4. 討議してほしいこと

- ①教育機器とバズ学習を1時間の授業の流れの中に組み入れるとき、生徒の座席配列はどんな形が最もよいのだろうか。
- ②生徒に対するバズ学習の基本的なやり方を訓練するために、必要最小限どれだけの理解や約束を徹底させるべきであろうか。
- ③授業は学習の主体は生徒であっても、教師の意図的計画のもとに、生徒を如何に変容させるかをめざして行われる。その1時間の目標行動を考えると、認知目標は具体的に明確に立てられ、即時評価やフィードバックも可能であるが、態度目標をどうとらえ、目標行動としてどう表わし、又チェックを具体的にどんな方法ですればよいだろうか。
- ④バズ学習が個の成長と共によき集団形成を図る事実をよくわかるが、集団の目標行動（○○○ができる集団）としては具体的にどんなものがあげられるか、また集団の成長状況（目標行動に対する到達度、成長率等）を評価するには、具体的にどんな方法があるだろうか。

第12回 全国バス学習研究集会
 読みを深め、感動を確かにするための指導法の改善

姫路市立白鷺中学校 福島 達郎

(1) はじめに

教師の発問と生徒の発表を中心に展開される、活発に見える授業の中で、落ちこぼれる生徒が出てくる。落ちこぼれた生徒を救う手だてとともに、生徒を落ちこぼさない指導法を考えたい。

(2) 感動を確かなものにするための学習過程

	学 習 過 程	指 導 上 の 留 意 点
導入段階	<ul style="list-style-type: none"> 作品の印象をとらえ発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 印象を主体的にとらえさせるとともに生徒の心にイメージの形成をはかる
展開段階	<ul style="list-style-type: none"> 情景、背景を大切にしながら文学の世界に入っていく。 作者の視点 主人公の感情の推移 主人公や作者の人間性 ことばを心象としてとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> 鑑賞上の問題点をつかむ 読みを深めるため、主題に即して問題を焦点化する。 読者(生徒)の位置が、客体としての情景から主体となるよう、作品の世界へ自然に移入させ、情景の変転、作者の視点、主人公の心理を関連づけながら鑑賞作業を進めさせる。 ことばをたいせつにし、それから受ける感じ、心のたかまりを発表させる。
終結段階	<ul style="list-style-type: none"> 中心的感情や感動をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 経験(体験)を生かしながら、自分との関連においてまとめさせる。

上記の学習活動を確かなものにするために、教材研究の過程で、次のような点に注意したい。

1. 時間ごとの目標をはっきりとさせ、授業の中心(ヤマ場)を、どこに持ってくるかを考える。
2. 目標に迫るため、入り方、出方を含め、その時間の流れを十分に考

える。

3. 目標に迫るため、どの場面で、どのような課題を設定し、バズさせるかを考える。

{3} 課題（差問）について

1. 学習内容と学習過程にあった課題であり、生徒の心情を十分にゆさぶるものであること。
2. 多面的なものの見方、考え方、感じ方を導き出すような課題であること。つまり、生徒の発達段階に合い、十分な思考や、バズに耐えうるものであること。
3. 発展性のある課題であること。つまり、問題を解決することにより、更に次の問題を生む、ある程度の複雑さを持ったものであること。

{4} 1時間の流れの中で（バズの位置づけ）

一般的な一斉学習を展開するなかで、生徒の心情を、どの場面でもどのようにゆさぶり、それを能率的に、確実に、しかも深く定着させるための方法が考えられなければならない。

{5} 問題の提起

1. 落ちこぼれようとする生徒を聞き手にするのではなく、積極的に学習に参加させ、活動の場を与えなければならない。
2. 人の意見ではなく、自分のものに消化して発表させる訓練がなされなければならない。
3. 教材（分野）によって、バズしやすい場合と、そうでない場合とがあるが、指導法の改善をめざしての授業の構造化が確立されなければならない。
4. 生徒が変わるためには、教師及び教師集団が変わらなければならない。
5. バズに関する評価の観点と尺度が確立されなければならない。

1. 人間形成の基本的な考え

ア. どの子どもに育てたいのか.

- ・人間形成について.
- ・ひとりひとりを生かすことについて. (要項. 1.)

イ. 児童の実態から

- ・発言も挙手もなく無気力な子どもが多い。..... 学習意欲を高める工夫はできているのだろうか。
- ・「教えられ、覚え、作業する、教師の指示がないと学習活動に取り組めない。.....」指導法はこれでよかったのだろうか。
- ・主体的に学習に取り組めてないため個人思考が不十分で集団思考が深まっていない。
- ・自己中心的な言動が多く、利己的競争的な学習活動がめだち支え合い励まし合う学習活動の体験は少なく連帯感が弱い。..... 学習集団づくりはできているのだろうか。
- ・共に学習する集団としてそのための規律や態度が身につけてない。
- ・学習活動条件や学力的に条件の悪い子どものことを考えた学習活動ができにくい。..... 人間性を大切にしているのだろうか。
- ・表面的な学習成果のめだち知識の伝達「教え詰め込み式」の授業が強く自ら学んでいく力、その子どもに精一杯がんばることで能力を引き出していく指導が不十分である。
- ・学習集団の育成が弱く、集団で学ぶ時の自己及び集団の規律や態度が養われていない。また学習者としての主体性、社会性、科学性が弱い。

・学習にはけりあう集団を育てることによって、豊かな人間性、社会性を培いたい

・学習集団を軸に学習に取り組み、学習意欲を高め合い、望ましい学力としての知識、能力、態度を培う指導法を創造し、個の可能性を引き出し伸ばしていきたい。

2. 研究目標の設定

力強い学習集団の中で、個の可能性を引き出し伸ばす。

3. 研究組織 要項 .2.

4. 研究計画の構成 要項 .3.

5. 研究方向と概要.

(1) 指導方法から見た研究

イ. 教材の精選・構造

● 小冊子 『工場』 (社会科3年 市の人の仕事)

● 計画 (10時間)

(A) 工場の多い所 (2)

- ・姫路市における工業生産高、工場分布(規模・種別)
- なぜ、重工業(鉄鋼)は海岸近くに多く、軽工業(電気、皮革、化学、紡績)は中流、北部に多いのか。
- 重工業は港、軽工業は鉄道、道路を利用して、工場は品物や働く人で、ほかの地方と結びつきながら仕事を進めているにちがいない。
- 検証計画

(B) 海岸にある工場 (4)

- 原料と製品、働く人の動き
- 他地域との結びつき
- 組織的 方法
- 製鉄、製鋼、電力、燃料
- 工場群の形成

(港が大きな役割をしている。)

(C) 内陸にある工場 (3)

- 働く人の通勤調査
- 郷土の産業とわたしたちとのつながり
- 他地域とのつながり(鉄道、道路)
- 原料入手先 ・工場用地
- 公害のない工業への対策
- 道路、鉄道が大きな役割をしている。

工場は、原料や製品、働く人の動き、自然条件、社会的な条件、交通の便、土地の条件、社会的事業が地を動かしている。

(D) 交通の働きとそのくふう (1)

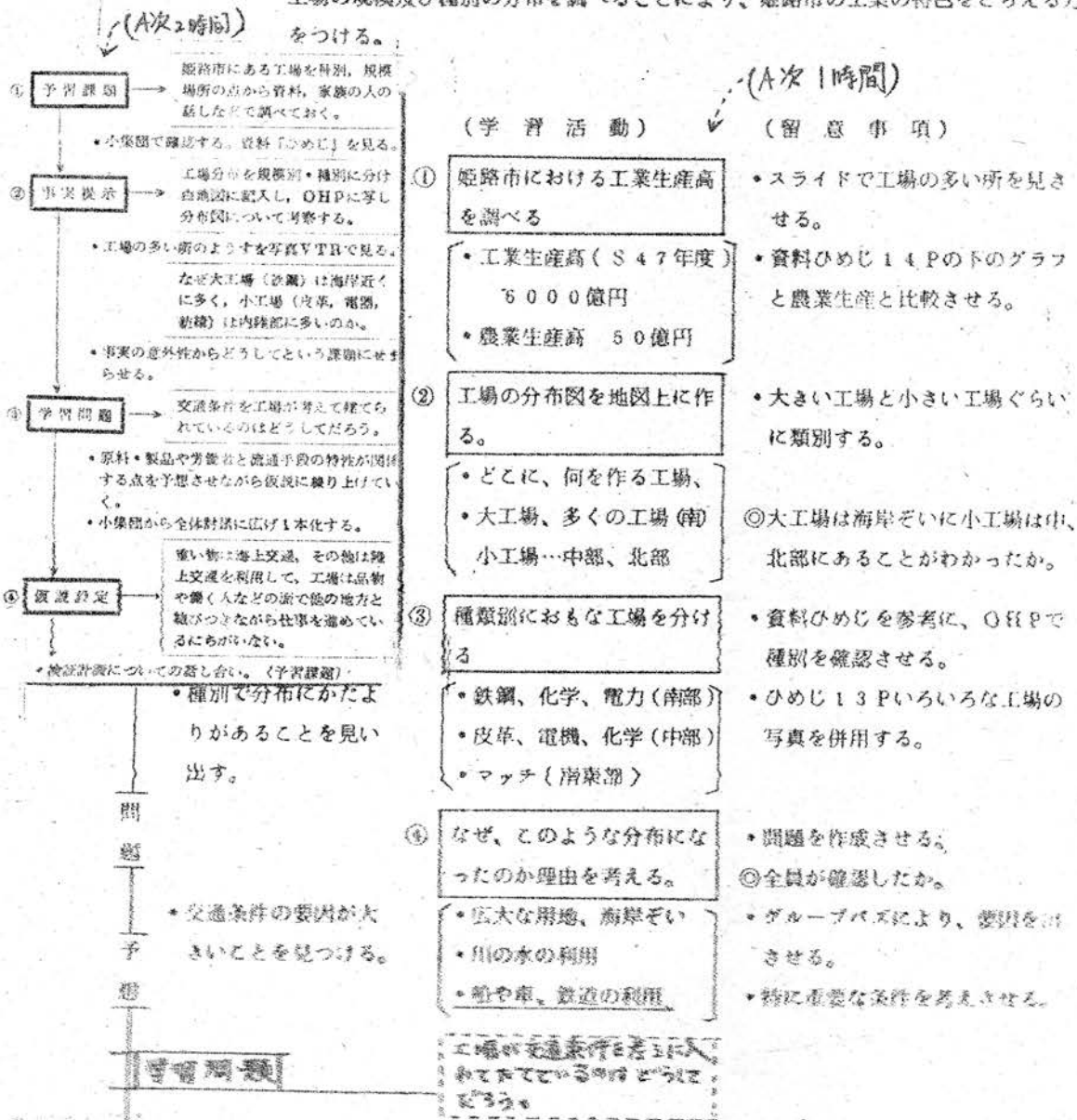
- 製鉄、鉄製品……港(船)
- 化学、皮革、マニラ……海(船)
- 人……陸(鉄道)
- 用水、地形、歴史
- 条件などの考慮
- (交通条件だけでなく、しごとを進めるうえで、他地域の結びつきが大きな働きをしている。)

7 探究過程の構造と学習課題の設定

● 学習過程 (例) 第A次第1次編

目標

- 姫路市における主要な産業である工業生産について、工場の規模及び種別の分布を調べ、分布の状態から立地条件を考え、主として、交通条件が大きな要因になっていることの意味が予想できる。
- 工場の規模及び種別の分布を調べることにより、姫路市の工業の特色をとらえる力をつける。



B 商店街のくふう ②

・店はとんなくふうをしてうりあげとふやそうとしているが。

・駅の近くに店が葉っているのはなぜだろう。

- 土地利用図 …… 駅・車
- 近くの店のちがわり
- 交通図 …… デパートと駅
- 店の種類
- 町のようす (商店会)
- 客 …… アーケード
- 売り出し、チラシ

C 大きい店小さい店 ①

・どのあたりの人がかいてきているのだろう。

- ・大きな店のようす
- ・小さな店のようす
- 店とかいもの客のくるはんい

駅の近くの商店街では、交通の便から遠くから多くの人が集まり、商店も買物がいやすいふうや、協力がされている。

家の近くの商店と、市の中心の商店街とでは、店の種類やようすにちがいが見られるが、それそれ売るためのくふうがされ、手に入れた買物をする人や、品物を仕入れるためには、他地域との結びつきも大きく、交通が大切な役目をもっている。

D 中央卸売市場 ②

・店のしなものば、どこかうとのようにして運ばれてくるのだろう。

- ・品物の産地しうべ、
- ・仕入れのようす
- ・中央市場のはたらき、
- 野菜やくだもの
- 魚や干物
- ・市場の仕事のようす、
- ・買う店の広がり
- ・道路、鉄道のつながり

品物は姫路市内だけでなく、遠くの外からも、トラックや鉄道により運ばれ、店は市場やおろし売り店へ品物を仕入れに行っている。

E 新しい道路計画 ①

・姫路市と他の地方を結ぶ道路はどのようなになっているのだろう。

- ・国道、バイパス道路、
- ・自動車道路とその整備、
- ・新しい計画道路

国道は、東、西、北といろいろな地域を結ぶようになっており、自動車道路など、早く便利に行き来できるようになっている。

事前テスト…省略

展開 第0次第1時

○本時の目標

・大小の商店の比較から買いに来る人のほんいをしらべ、店の大小は消費者によってきまることをみつける。

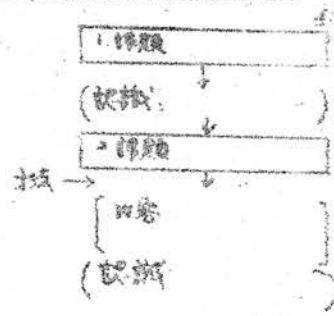
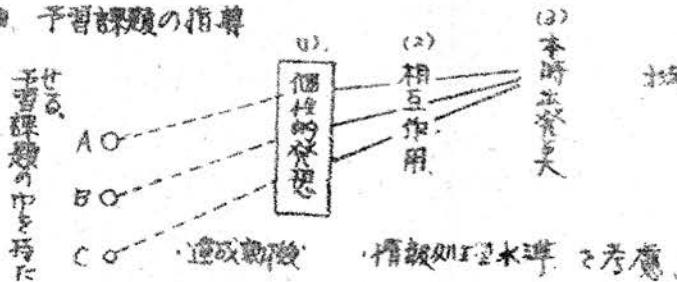
○本時の展開

過程	学習活動	指導の留意点	能力との関連
みつける	<p>1. 市の中心にあるデパートと近くの店をくわべ、ちがいをみつける。</p> <p>・たてもの 店員 品物 買い物客</p> <p>2. 問題をみつける。</p> <p>↓</p> <p>どうしてデパートは買いものにくる人が多いのか</p>	<p>・有名デパートと食料品店のスライドを提示物。</p> <p>・店内のスライドなども参考に比較させる。</p> <p>・店の大小、客の多さが問題になった時は態度がはげすむので注意する。</p>	<p>・経験や資料から比較、思考しその特徴をつかむ。</p> <p>・探究問題をみつける。</p>
よそうする	<p>3. 問題のわけを考へる。</p> <p>・品物が多い→たくさん売る、</p> <p>・人口が多い→にぎやか、</p> <p>・人が集まる→遠くからくる、</p> <p>4. よそいをまとめる。</p> <p>↓</p> <p>デパートは遠くから、近くの小さな店は近くの人しかいれないから買う人が多いか少ないかができるのではないか。</p>	<p>・子どもなりに考へといかせ討議させたい。</p> <p>・交通との関わりがみえると、その因果を追求させたい。</p> <p>・「どのあたりの人が買いに来ているのだろうか」と考へ問し考へを促させる。</p>	<p>・現象を推論し社会的意味を考へる。</p> <p>・仮説見解を自分なりに持つ。</p>
たしかめる	<p>5. 買う人の多いわけを調べる。</p> <p>・買いものしるべから、</p> <p>・折り込み広告から、</p> <p>・客のくる地域の広さを、</p> <p>近く、駅前、広畑、環路、遠くの店をくわべらる。</p>	<p>・今在家、構の班別しらべ表と比較させ、地域の商圏のちがいをみつけさせる。</p> <p>・広告をくべているほんい。</p> <p>・地図上で集まる広さをたしかめる。(具体例)</p> <p>・OHPで比較させる。</p>	<p>・調査した資料から店の客のほんいをみつける。</p> <p>・具体的な思考を抽象化イメージ化する。</p>
よとめる	<p>6. つかめたことを文にする。</p> <p>↓</p> <p>デパートのような大きな店は遠くからも買いにくるが、小さい店は近くの人だけ買いにくる。</p> <p>次の学習のめあてをつかむ。</p>	<p>・次時市場の学習を予告</p>	<p>・学習のよとめを文章化し役金の定着を促す。(評価)</p>

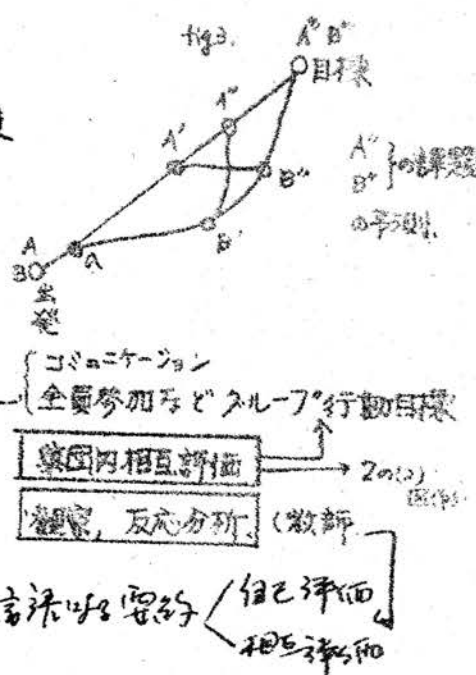
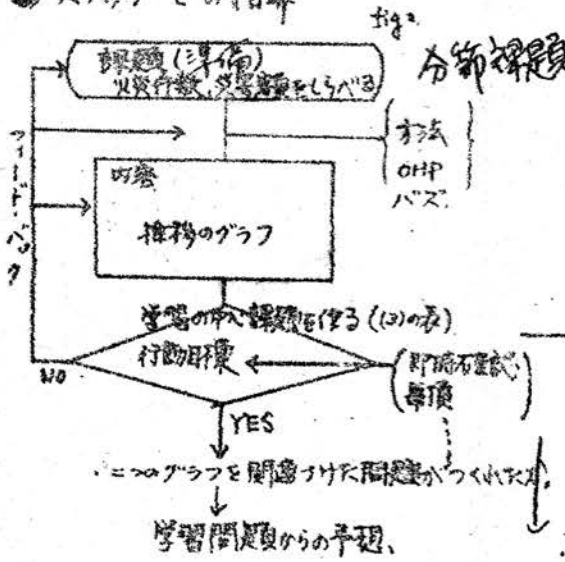
● 学習サイクル内の各ステップは4段階8分節の探究学習方式による。

● 指導段階におけるフード・バック機能

① 予習課題の指導



② ステップでの指導



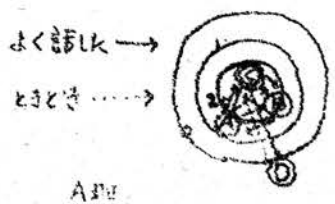
● 事後テスト

・サイクルごとに下位行動目標の達成状態についてその成果を測定する。

● 把持テスト

・学習の定着率を行動目標について測定する。

● 態度 目的活動に関する自己評価, 相互評価



1. 学習の中心になりよとの役をし人 (+3)
2. 人の意見をよくきいていく人 (+1)
3. 自分勝手に行動をし人 (-1)

APU

(2). バズ集団育成の研究

ア しくみづくり (準加集団)

(ア) 小集団の組織づくり

● 学習集団の構成と育成に関する評価

・ YGテスト (A見) **平凡型** 安定積極型, 安定消極無力型, 不安定消極不
適応型, 不安定積極非行型

・ R-R方式調査 (相対主義的關係座標方式 (R.R.R.M.) による思考タイプ²の型)
例 (A見)

逆状股					d.A.Y.					DIAK・MS				
1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
2	4	1	2	2						A	R	K	a	K
3	7	7	4	4			2		γ	0	3	7	6	?

理想型, **混成型** 散発型, 此幕合型, 薬合型, 拮抗型

・ 思考テスト (A見)

連語テスト	27	級単語再生テスト	5	直観連想 拡散 創造 集中統合 関連集合 比較整理	上(甲)	下(乙)
同意異義語テスト	9	語群命名テスト	5		上(甲)	下(乙)
用途テスト	4	言語的抽象テスト	3		上(甲)	下(乙)

・ ソシオメトリー

・ 直観性判断傾向 (A見)

収束	膨脹
短詭	判断

・ IQ 73

・ 学習 行動の総括評価 **上** 中 下

1型 關係的総合的思考 2型 問題的問題的思考 **3型** 直観的概念的
思考, 4型 表面的断片的思考 5型 依存的困窮的思考 (A見)

上記診断テスト等の他、学習及び行動の観察、指導の既録等をもとに
集団構成をほめる。なお、集団は、相互信頼、相互強化、個性的問題解決
目的責識共同体、ストラテジーをもった、広かめあえる、個性的な、科学
的能力のある集団であることが望ましい。

●小集団の編成方法、(生活、学習集団の班づくり)

- ・小集団細分化の意義
- ・編成方法

・御座による方法 --- くじ、座席順、出席順
 ・指導者の指名による方法 --- 評価にもとづく要領グループの形成、
 ・ソシオメトリックによる方法
 ・リーダーの立候補または推せん制、
 ・仕事中心による方法

これらの編成方法には一長一短がある。目的活動により決定する

- ・生活集団と学習集団のはたすべき役割りや必要とする機能、
- ・生活集団と学習集団の統合と課題解決への目的活動の同時性と要復性、

(イ) コミュニケーション作り

話す、聞く、読む、書くの活動を通じて、課題解決と相互理解をはかる。

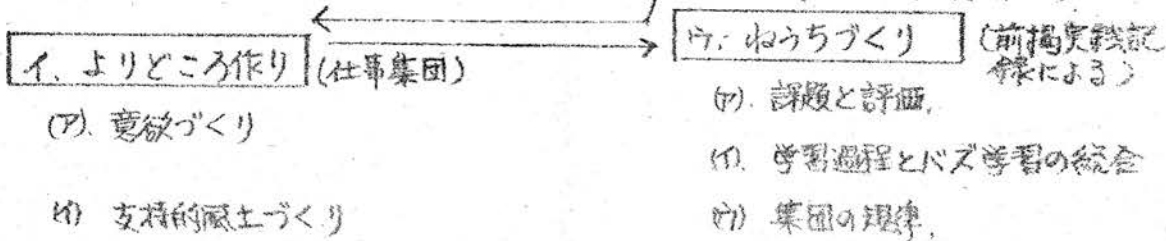
- ・生産的思考の三つのタイプによる話し合い活動の在り方。

- ・あつめるバズ (発散的思考) 比較 関連
- ・まとめるバズ (収束的思考) 類別 異同
- ・もつめるバズ (収斂的思考) 因果 条件 発展

過程での生かし方

- ・書くことの指導とそのまとめ方

- ・生活班として、
 - ・学習班として、
- ノート、カード、



昭和52年11月

ひとひとりを生かす集団づくりをめぐって

学級係り活動における小集団の活用

姫路市立高岡小学校

山本進

1. 集団スキームの必要性

子どもたちがよく学級を探し、ここでなければならぬ。楽しいということは、子どもたちが教師や学級集団に支えられ、集団への所属感に満ちられることであろう。

学級は個の集合体である。しかし、これが単なる個の集まりでは、そこには「確かな学力」を「人間として生きる力」を育ててくれないであろう。ここにわたることは、望ましい学級集団スキームの必要性を迫られる。

望ましい学級集団スキームは、個と個、個と集団の相互作用を基礎とし、望ましい人間関係を形成していく活動を通じて、学級の子どもたちが、個として、集団の成員として望ましい人格を形成していく過程である。

学級の子どもたちは、学級という場で、授業と特別活動の二つの教育行為を通じて、人格を形成していく、この二つの行為が互いにからみ合っており、互いに高め合っていくものである。わたしが願っている望ましい学級集団スキームは、授業という側面からだけでなく、成果の期待できない。特別活動も含める学校生活のすべての領域を考慮され、総合的に組み立てられなければならない。

ここでは、学級内での係り活動を中心とした学級集団スキームの実践をとりあげる。

2. 教師の姿勢

子どもたちの自発性から出発して、自主的に仕事を許容し、活動する係り活動を通じて、望ましい学級集団の高まりを期待するためには、教師の教育的要求を子どもとよく適切に把握が必要である。指導するためには、まず個と集団の理解が必要である。理解をともなう指導し、指導した結果を評価する。評価は次の段階への指導のための理解としていく姿勢を基本とする。

3. 学級係り活動を通して育てようとするもの

学級の子どもたちが係り活動を進める中で、自分の役割や仕事に責任をもち、相互支持のもとに共同することのよいこと

さ 他に役立つことのねうちを解説させ「自分を やれば できるのだ」と 言う自己価値感の育つことを重視している。

4. 学級集団スミリの実際

わけは 集団スミリの重要性については 十分わかっているのであるが 具体例などのような方法でやればよいかわからなかった。そこで 現在「これがやってもできる」「これがの納得できる」学級集団スミリの手順や方法は どのようなすれはよいかにと組及 決のような方法を行っている。

(1) 学級集団の理解

① 個としてのホトケとウソク理解など

集団の中で ヒトリヒトリを生かすためには ます 集団の成員である個の理解が必要である。4月から5月にかけて 教師の観察 家庭訪問 学級にある諸記録の整理をし それらをもとにして学級フ・ロフ、ロールを作成する。学級フ・ロフ、ロールによって 身体状況 学力 性格 適応状態等 個のもつさまざまな条件を正確に把握することを目指す (表 1)

氏名	学			力		身		体		家		性	格
	国	社	算	理	その他	体格	体力	その他	構成	その他			
1 Y	5	5	4	5	リル - 醒 手	4	4			5	中3・小3	まじめであるの自分だけで こつこつ仕事をする	
2 K	5	4	5	4		2	2			6	極端・幼1 小4	活動的で発言が多い 大声で話す自己主張の強い	
3 U	4	5	4	5	図 I	3	2	先天性足首脱臼		4			

② 個の所属する集団の条件をとらえて理解を図る

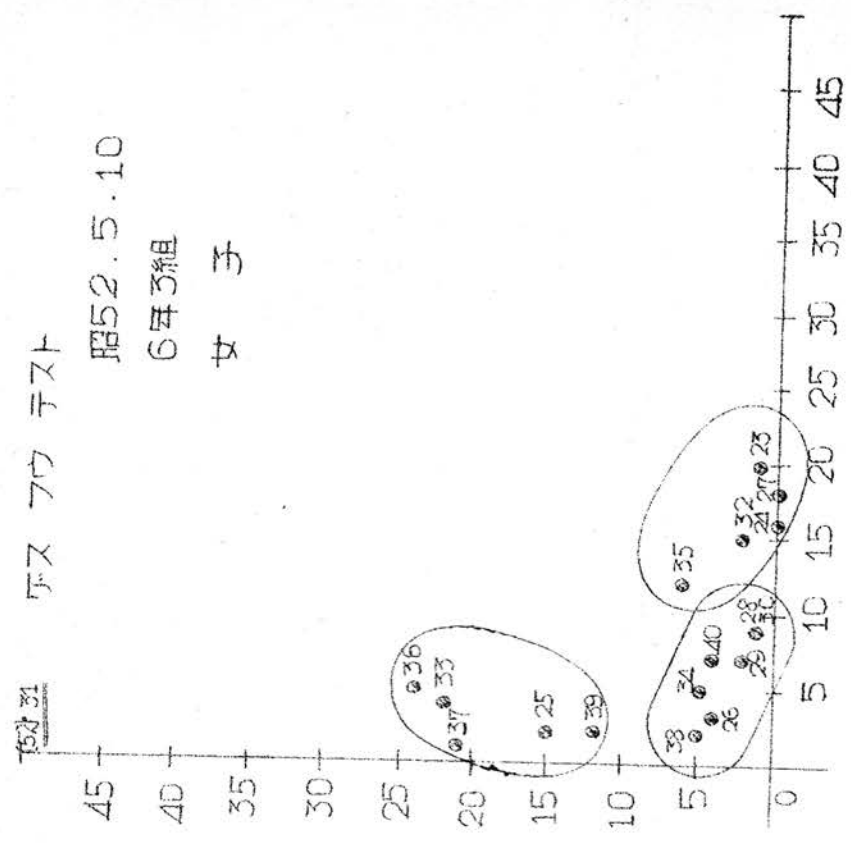
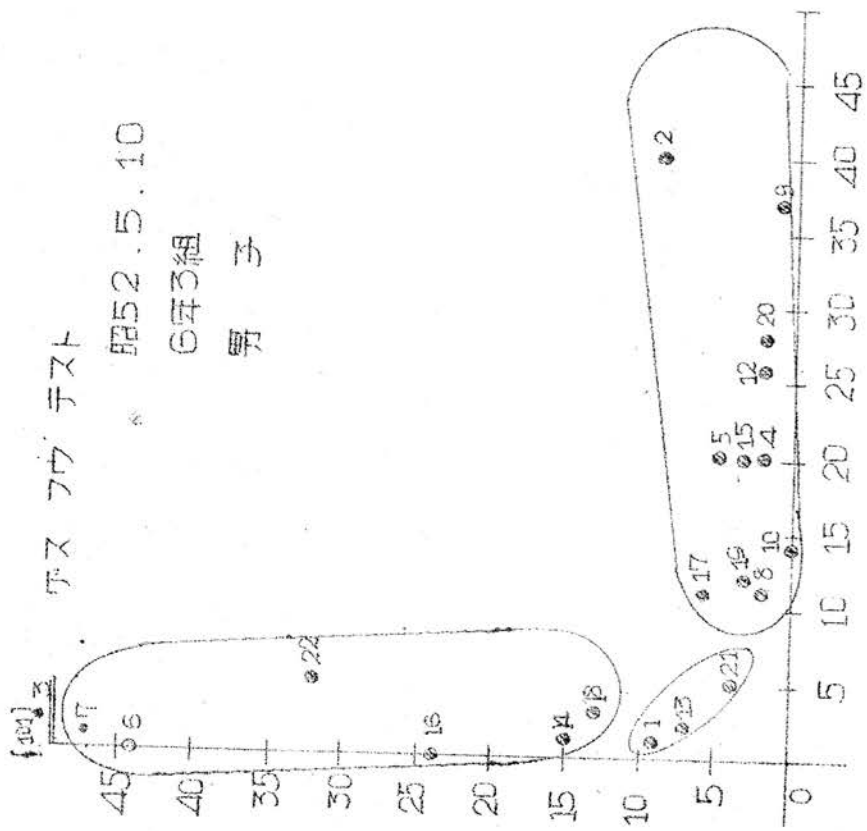
子どもたちは、学級集団にうけとめられ、支えられて自己価値感が育つ。自己価値感が育つことにより、学習や競争への意欲が高まる。

学級の子ども区ち全員が、そろって教師や学級集団に、しっかりとつとめられ、支えられているとは限らない。学級集団の構造、集団の人間関係、集団における地位や役割などを理解すると、ひとりひとりが学級集団に支えられている状態のちのちを把握することができる。

学級集団は成員である個に対して、きまりを守り、役割返りには結果することを要求する。ひとりひとりの個を理解するには、その個の行動を強く規制する集団をとらえるだけでは不十分である。そのためには、6月1回目のシオメトリックテスト・ソシオマトリックテストを実施し学級集団内の人間関係、集団の構造と組織、個の集団における地位等について理解を図った。結果は次の表のとおりである。(表2)

	構成する人数	性別の人数	社会測定的地位得点の高川児童	問題	持ち	性別	児童
第1下位集団	11	男9 女2	7男[23] 16男[14] 6男[4]	高	辺	児	6
第2下位集団	12	男2 女10	31女[16] 14男[10] 34女[1]			男	2 女4
第3下位集団	5	女5		孤	立	児	2
第4下位集団	2	男2					
第5下位集団	2	男2					男2

⑤ アス7-テスト

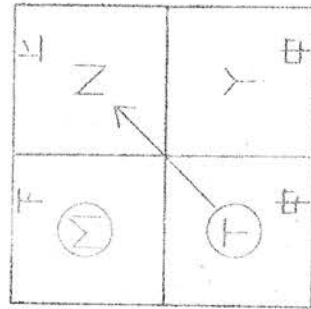


[1] 学級係り活動班の編成

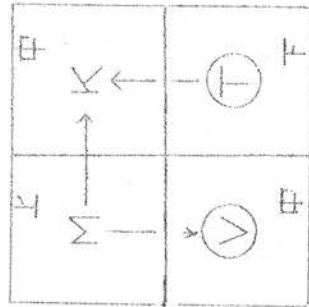
。所属決定の基準

学級集団理解の資料を基として教師側からの化律的編成とする。人物は4名 男が混成 集団内異質 集団間等質とする。同じ性別 孤立児の配置には特に留意する。

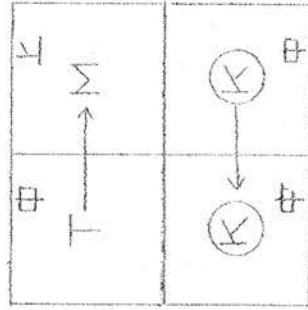
(例 図1) 相互選択 相互排斥は同じ班に組み込まない。社会制定的地位得点(SSSS)の高い児童を各班に配置する。



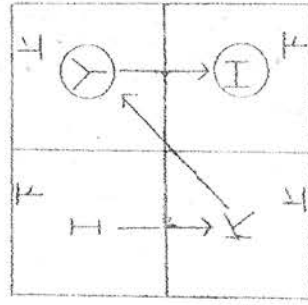
同 四 児 M



。 孤 立 児 V(男)



△ 孤 立 児 K(男)



同 四 児 I(女)

(完全閉室ブロック)

。 班 の 性 格

学習活動を中心とした学習班と学級係り活動を中心とした生活班とを同じ同メンバーで構成し 学習と生活場面の活動が流通して ように近づけて望ましい人間関係を形成していくことを願う。

[2] 目標の共有化と役割の分担

係り活動は 学級集団の生活を維持し 発展させるための協同的活動である。 そのための ような手順を小

んで目標の共有を図った。

- 1 自分たちの学級をどんな学級にしていきたいか。(学級会……話し合い活動)
小学年最後の学年として、楽しい思い出が残る学級生活を送りたい。
- 2 みんなの願っている学級生活を表現させるためのどんな係りが必要か。(学級会……話し合い活動)
学級新聞係 卒業文集係 掲示係 学級文化係等を決定する。
- 3 設置された係りや各班のどのような役割をするか。(班別に話し合い→全体の話し合い)
。自分たちの班の役割をどうしようかという計画し実行するといっただまに班の話し合いを十分にとり上げて全体の場を盛り上げる。
。各班の案を全体で検討し 修正し とうえを 目標 計画のすくりに班の係りを依頼して役割の分担を決定する。
- 4 決定した役割について 各班で各班で話し合い 具体的な計画を立てる。(班の話し合い)
- 5 計画は目標を検討し 2ヶ月を単位として長期計画を立てる(2ヶ月で班を構成させるための)。 (班ノート 記録簿)
- 6 長期計画にしたがって さらに全体として一週間単位の活動計画を立てる。(表 3)

(表 3)

指 導 の 観 点	第(3) (文 化) 係り活動の記録 9月18日 記録(高原)
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 班代表勝ちぬぎ戦の計画をできる限り具体化させる。 ◦ 目標の共通理解を十分図る。 	<p>1. 今回の活動予定の話し合い (順序 方法)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ オセロ大会 班代表 勝ちぬぎ戦をする <p>2. 今回の活動の記録 (分担 活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ 朝の会 (ロケ隊のえんぞう) 京 ◦ 勝ちぬぎ戦のしんぱん ス ◦ 結果の記録 高 ◦ 結果の表示 茂 <p>3. 先生から みんな楽しんでいてだね。今回の活動で 特に感じたのは は <u>手製のオセロです。</u></p> <p>4. 評価 A (B) C</p>
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 1人1役とする。(仕事の分担) ◦ 個人の責任と班の責任を明確にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 教員は各班の計画を支持し 仕事の結果より結果に至るまでの過程をいれつけて指導する。
<ul style="list-style-type: none"> ◦ 班による評価 (一週の後省として) 	

<p>5. みんなに相談すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦しずかにしてもらう。 ◦ルールを守ってもらう。 ◦時間をもらう。(先庄に相談する) 	<p>◦給食時間 終りの会に他の班に協力を依頼する。</p>
<p>6. 次週の子定</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦オセロ大会のつなぎをする。 	<p>◦計画の全体的なみとおしを常に持つさせる。</p>

[3] コミュニケーション

① 事前の話し合い → (班ノートに記録)

次のように焦点をぼけさせ話し合いをさせるよう指導する。

- 「なんの区めに」するか 目 的
- 「なにを」するか 内 容
- 「いつ」するか 時 間
- 「どこで」するか 場 所
- 「だれが」するか 仕事の分担

② 活動中の話し合い

- 特に話し合いが必要な問題があった場合の及 仕事が終わったあととする。
- 自分たちの仕事ぶりについては アンケート式に他の班の意見を聞く。

③ 活動後の話し合い

- 問題点を反省する。
- 視点をきめて反省する。
- 活動の成果を味わう。

④ 自己価値感を支えるための

- 子どもたちの活動の状況を十分観察し 機会をのがさず賞賛と助言をする。
- 仕事の成果より過程の努力を重視する。
- 問題のある場合には 個人面談 班の全員と教師で十分話し合い返す。
- 班じまんを定期的に表示する。
- 感情的にならない 子どものよさを夏つけていける。
- 役割 仕事の分担は固定化せず 班の成員それぞれが経験するようになる。

⑤ 評価と反省

- 自己評価を次のような形式（10項目）で実施し 自分の仕事に対する態度や意欲について反省させる。
- 教師は問題の発見と指導の資料とする。

[] 年 [] 組 氏名 [] [] 月 [] 日		
学級の係りの仕事について 正しき回答して下さい。	はい	いいえのいずれか10を記入して下さい。
[1] グループの前番や自分の仕事の分担をわかってしましたか。	はい	いいえ
[2] 係りの仕事は楽しいですか。	はい	いいえ

[2] 学級全員で行なう相互評

[係りの活動がいろいろについて思うこと]	氏名 []
1. 係りの活動を積極的にやっていると思いますが。	1 2 3 4 5
2. 係りの活動をさくさくしてやっていると思いますが。	
3. みんなの話をよく話し合っていると思いますが。	
4. みんなが助け合って仲良く活動していると思いが。	
5. 計画や手順をよく考えて活動していると思いが。	

※ 学期は 2 ～ 3 回実施する。

5. 今後のとり組みと問題点

子どもたちとととに手ごくりで実践してきたが、日と深く 結構つけるものは可なり現状ではある。 だが 3 ととに
ちが 自主的 意欲的に係り活動にとり組みはじめ 時間や経費の問題 活動には必要な材料の準備等 つぎつぎの問題が生
まれてくるが この問題を1つ1つ解決していくことが、さらに質の高い学級集団をつくることになると信じている。

第12回 全国バス学習研究集会

同和教育とバス学習

— なかまの願いを受けとめる学級集団づくり —

姫路市立八木小学校 市場 郁也

<研究テーマとその要旨>

「同和教育とバス学習」— なかまの願いを受けとめる学級集団づくり—
ひとりひとりの子に学力を保障し、人権意識と差別の科学的認識を育て、
解放への実践力を身につけさせるには、生活の中で差別をすどく見ぬき、
人間としての基本的な願いを学習の場や生活の場に素直に出す能力と態度、
連帯して問題を解決する力を十分に付けなければならぬ。そのために、
認知目標と態度目標の同時達成が可能な「バス学習」を通して、人間形成
をめざしている。

<研究経過の概要>

1. 52年度教育努力目標・同和教育努力目標を設定する。

教育努力目標	同和教育努力目標
○ひとりひとりを伸ばす授業の創造	○学力の保障
○向上心、自主性の伸長	○人権意識と差別の科学的認識の養成
○教育の本質に根ざした同和教育の実践	○集団形成(仲間づくり)
○健康安全教育の充実	○校区同和教育の推進

2. 「教材の精選・構造化」・「学習集団づくり」・「連帯をもった問題解決」
等の具体的方途の究明を図る。
3. 努力目標達成のための一方法として、バス学習の研究と実践に取り組む。
4. 校内研修会を通して、研究と実践の積み上げを図り、現在に至る。

〈問題提起〉

1. 学力が十分に保障されないままに低位に置かれている仲間が実在している現実を、差別とどう受けとめさせ、「学びたい」「知りたい」の願いをバズを通して学習の場へどう出させているか。
2. 同和学習を基盤にして、人権意識や差別の科学的認識を育てる手だてとして、バズ学習をどう取り入れているか。
3. 生活の中にある差別性に気づき、連帯の問題として受けとめていく態度をバズを通してどう育てているか。
4. 学び合う学習集団づくりを具体的にどうすすめているか。
5. 同和学習におけるバズ学習と教科学習におけるバズ学習の相違点は何か。また、その接点をどこに求めているか。

〈特に討論を希望する問題〉

1. 人権意識育成の過程で、人権を踏みこじった罪悪感よりも、踏みこじられた被害意識が優先する傾向を、バズを通じてどう解決していくか。
2. 同和学習の場で、認知が先走り、態度目標としての行動力・実践力が遅れる。即ち、差別を概念的にとらえていこうとする傾向をどう克服するか。

第12回全国バズ学習研究会

研究テーマ

課題意識に立つ同和学習の実践

—実態と学習・知と実践のずれを克服する手だてをさぐる—

姫路市立旭陽小学校

〈研究テーマとその要旨〉

本校は「課題に意欲的にとりくむ子ども」の育成を目標にしている。それは自ら学ぶ努力やくふうする力、仲間意識に支えられて自己実現をめざして意欲的にとりくみ差別を許さぬ子どもを育てることである。学習や生活のあらゆる場面で現実の問題をみつけ、たがいに認めあい、支えあい、励ましあうことによりみんなで解決する方法を仲間とともに考え、それにもとづいて行動のできる主体的な子どもを育てる。また学習や生活を通して生きて働く力を身につけさせ可能性にいだむ子どもを育てるためにひとりひとりをたいせつにし、その願いを尊重し、事実や現象の背景にあるものを追求しながら、差別の本質を正しく認識させたい。

〈研究の経過と概要〉

1. 実態に立ち課題意識をもった同和学習の実践

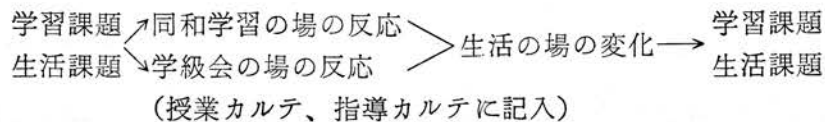
課題意識をもって学習にとりくみひとりひとりの願いを保障しみんなが支えあい、はげまし合っていく同和学習を創造する。

- (1) 観念的学習の排除。生きた現実の教材化、本音と本音のぶつかりあう授業を指向
- (2) 実態から主題の構成
- (3) 主題にせまる課題づくり — 児童の悩み願い解決要求の高いもの
- (4) 学習資料の研究と収集 — 問題の核心に迫り内面をゆさぶるもの
- (5) 互いに認め合う学習集団づくり

月	主題	目 標	学 習 課 題	資 料	ね ら い	
					同	道
5	たがいに認め合う	<ul style="list-style-type: none"> なぜ差別がなくならないかを差別する人、される人について考え差別の 	<ul style="list-style-type: none"> 学級内での差別はないだろうか 「大石さんのこと」を読んで、どうして差別がなくならないかを考える。 	友だち 5 「大石さんのこと」 副資料 作文 日記	4	16

2. 知と実践のズレを克服する指導

生活指導は、同和教育の具体的実践指導である。学習と生活のサイクルの上に、継続的、追跡的に指導することによって児童の行動変容が期待できる。そのため次の手順で指導を進めている。



<問題提起>

- ひとりひとりが課題をもち、その課題が学習集団の共感を呼ぶ課題の成立となってゆれ動きわきあがるような課題の実現をめざして密度を高め進めるには、子どもひとりひとりの実態をよりこまかくはあくしながら主題をどのように精選し系統的に偏成していくか、さらにその課題を授業にどう組織し展開していくか。
- 観念的学習を排除して、すべての子どもが、自分の問題として実践していくすじ道を明確にするための手だてをどう進めるか。
- 課題解決過程（目標達成過程）における評価をどうするか。

第12回全国バス学習研究集会

「より充実した学校生活を送る為の特設バス」

姫路市立 林田中学校

〈研究テーマの要旨〉

本校における従来の短学活の主なねらいは、生活態度の望ましい育成であった。しかし生徒会活動や短学活の運営が自主的に生徒たちの手で出来だすと同時に、基礎学力の低さが目立つようになってきた。

その一因として学習に対するとりくみの甘さがあるのではないかという反省の上に立ち、本年よりこの短学活を「第七校時バス」として新たに特設した。この七校時バスは「復習バス」を中心にすえて基礎学力の向上と学ぶ態度の育成をはかると同時に望ましい人間関係をも育てることをめざし以下の目標にそって実践している。

イ. 支え合う集団づくり

ロ. 意欲的に学習にとりくむ為の望ましい学級集団づくりと
学び方の取得

ハ. 自主的に家庭学習ができる積極的な態度の育成

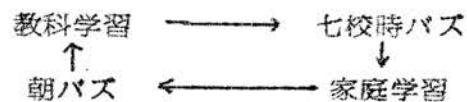
〈研究経過の概要〉

48年度 小集団による学習指導の研究 → 基本的な体制づくり

50年度 同上 → 学ぶ姿勢の確立

51年度 短学活をより有意義に → 復習バスをいかにとり
入れるか

52年度 七校時バスと家庭学習の接点を求めて



<問題提報>

1. 問題となった点

- 特設バス中における厳しさの追求

2. 特に重点をおいて取り組んだ点

- 教科学習の指導法
- 家庭学習の習慣化
- 遅進生徒を含む全生徒のレベルアップ

(/ 5%前後の遅進生徒へのとりくみ)

3. 今後解決せねばならない問題点

- 課課外活動との時間的調整

(班長会議・課題作成・個別指導 等による)

- 評価の研究

4. 将来の展望の上に取りあけるべき問題点

- マンネリ化の防止法
- 教師集団の意志統一
- 教材の精選化と厳しさを追求した授業研究

同和教育との分りみのほかから

姫路市立白鷺中学校 田中 稔 郎

[1] はじめに.

自己点検を中心として、同和教育への出会いから、今日、通学保障の取組みに至るその時のほか、課題をさらしながう、将来に向けての私のほかのこと提起したい。

[2] 同和教育との出会い —— ことばの同和教育時代.

—— S.36 ~ 40. ——

- ・はじめでさいに“同和教育”
- ・町会 --- 憲法解釈に終始して.
- ・学力補充学級 --- “ほだ、あの村だけに”にこたえられなくて.
- ・“問題をおこさぬように”を命じられる.

—— ことばだけ、差別そのものを認めようともしない ——

[3] 地区にはいって、地区で学ぶ。—— S.40 ~ 49

(1) 初期 — 学級不統一時代 —

- ・同和学習が楽カリストに
- ・校長に“姫路には姫路のやり方があるんや”としかかれて.
- ・同和学習、地色態をさげようとする学級
- ・非行、低学力も“しかたがないんや”とあきらめられ取り.

(2) 中期 — 活カと直カにみちる時代 —

- ・地色態の開始と突破口に
- ・差別の実態をさらされるほかで --- さけて通れぬ現実の重さ

同和学習のこと

初踏認識のこと

地歴のこと

補充学級とその問題点 --- 学校、地歴、P.T.A.

資料収集とプロジェクトチームの活動

(7) 後期 — あらたな苦のうの時代に —

- ・その学力をどうとらえ、どう克服していくのか
- ・育友会(補充学級)の研鑽とその問題点

[4] 進路保障へ — 地歴を交え、地歴を変える子どもたちに —

(7) 地歴卒業生の進路の概観

(8) 少教員の学級、学校における位置と教師の姿勢

(9) 堺市立中学校の進路保障のとりくみ

[5] まとめ

「地歴だけ よく知っても 日本の民主化は考えの小さい」

しかし、地歴をぬいて 日本の民主化はない」

第12回全国バス学習研究 集会

「自から学ぶ子」を育てる教育の創造実践

龍野市立神岡小学校教諭 常城重代

1. 研究テーマとその要旨

— 認め合い高め合う学習集団をめざして —

も言わぬ子どもたちが、何らかの形で発言する。そうした初步の段階から、学習を自分のものとして受け止め、立ち向っていく意欲のある子どもにまで高める。そのためには、その母体となる学級集団を、互に認め合い支え合う相互の人間関係を大切にし、さらには、学習の主体者としての資質を自からの中に培っていく意欲ある集団として育てる必要がある。そのためにバス学習を意図し実践していきたい。

バス学習の目的は、
「認め合い高め合う」

2. 研究経過とその概要

個々の子どもたちの願いから

学校に来たら勉強がわかりたい。
発表ができるようになりたい。
友達と仲よくしたい。



集団の目的を考える

支え合い認め合い高め合おう
(やさしく教え合う、きびしく磨き合う)



目めてに向けた実践

バスを通して、生活と学習の一体化をはかる
中で-----。

バスのための
たがやし

→物言うことへの抵抗に挑戦するために

- ・生活記録による自己反省
- ・発表テープによる自覚の向上
- ・カードによることばの訂正 -----等々

バスの焦点的
指導の場

→バスの楽しさがわかるために

・国語科 話し方、話しことばなど能動的なもの)を中心に、テーマに迫る指導

・社会科 (課題解決学習の道すじの指導)

…等を、教科学習スルーフ家庭学習スルーフの実践と結びつけながら----

バズの深化を求めて

→学習を自覚的に捉え、深く追究するために

・学習計画の立案

・学習課題の設定

・学習姿勢の反省

}等と子どもたちの手に

・聞くことの徹底

(分類しながら聞く — メモをとる
自分の考えと対比しながら

・話すことの強化

(質問に答えているか
自分の意見は受け止められているか

…等々

3. 問題提起

①バズ学習の基本は、「聞く・話す」の相互活動であり、その中における人間関係の陶冶が第1ではなからうか。

自己の学習権

相手の学習権

}を大切にする人権尊重の精神に徹すること

②「聞く・話す」の基本的訓を、学年学級間に組織だてること、と同時に、司会的発言、リーダー的発言を重視し、訓練を重ねることの大切さ。

③バズを深めるために、学習計画、学習課題設定にどう関わらせるか。

4. 特に討議を希望する問題点

①児童個々の能力差と、参加度をどう調整していけばよいか。

②バズ学習によって、学力の定着度はどう高められるのか。

以上

第 12 回 全 国 バ ス 学 習 研 究 集 会

ひとりひとりを生かす集団づくりをめざして

学級係り活動における小集団の活用

姫路市立高岡小学校 山 本 進

「研究テーマとその要旨」

望ましい学級集団づくりは、個と個、個と集団の相互作用を基盤として望ましい人間関係を形成していく活動を通して、学級の子どもたちが、個として、また集団の成員として望ましい人格を形成していく過程である。

学級の子どもたちは、学級という場で、授業と特別活動の二つの教育行為を通して人格を形成していく。この二つの行為はたがいにかみ合っさせられ、高められていくものである。

わたしが願っている望ましい学級集団づくりは、授業という側面からだけでは成果が期待できない。特別活動を含める学校生活すべての領域で考えられ、総合的に組み立てられなければ目標の達成は図れない。

ここでは、学級内での係り活動を中心とした学級集団づくりの実践をとりあげる。

子どもたちの自発性から出発して、自主的に仕事の計画をし、活動する係り活動を通して、望ましい学級集団への高まりを期待するためには、教師の教育的要求にもとづく適切な指導が必要である。指導をするためにはまず個と集団の理解が必要である。理解にもとづいて指導し、指導した結果を評価する。評価は次の段階への指導のための理解としていく姿勢を基本とし、学級の子どもたちが係り活動を進める中で、自分の役割や仕事に責任をもち、相互支持の中で共働することのたいせつさ、他に役立つことのねうちを理解させ、「自分もやればできるのだ。」と言う自己価値の育つことを願っている。

「研究経過の概要」

1. 学級集団の理解

- 個としての条件をとらえて理解を図る。
- 個の所属する集団の条件をとらえて理解を図る。

2. 係り活動の実際の展開

(1) 係り活動の班編成

- 所属決定の基準
- 班の性格

(2) 目的の共有化と役割の分担

(3) コミュニケーション

(4) 自己価値感を支えるために

(5) 評価、反省と次週への仕事の計画

「問題提起」

1. 学級集団の事情や発達段階によって、さまざまな班編成が考えられるが、学級集団の質の高まりを期待するためには、今後どのような発展と指導を考えていけばよいか。

2. 係りの相互の競争意識が高まり、他の係りよりもよい活動をしようという意識が顕著になってきたが、これを望ましい方向に育てる指導をどのようにすればよいか。

3. 子どもたちの積極的な活動にともなって、仕事の量、活動に必要な時間が多くなり、限られた週時数の中に係り活動をどう位置づければよいか。

「特に討論を希望する問題」

1. 学級集団の質的な高まりを（形成過程）適確には握る評価の方法を今後どのように計画すればよいか。

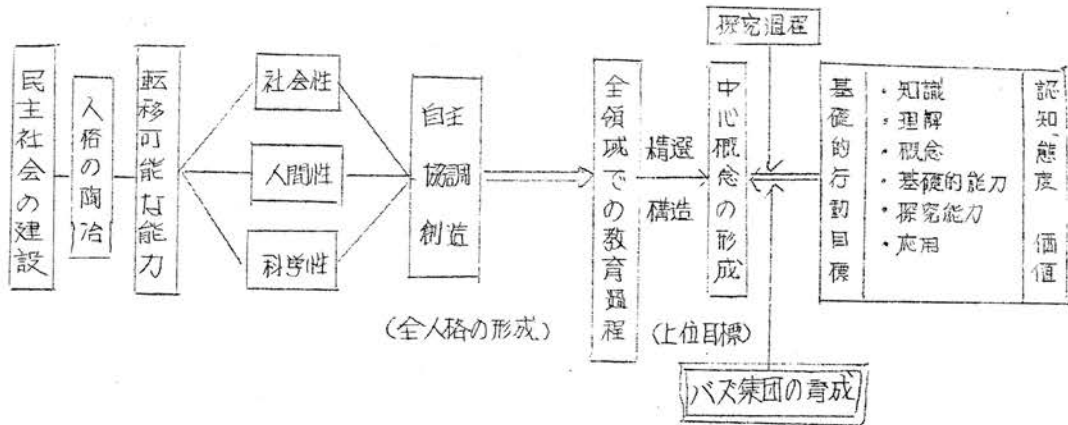
第12回 全国バス学習研究集会

力強い学習集団の中で、個の可能性を引き出し伸ばす

鹿沼市立城北小学校 井上大和

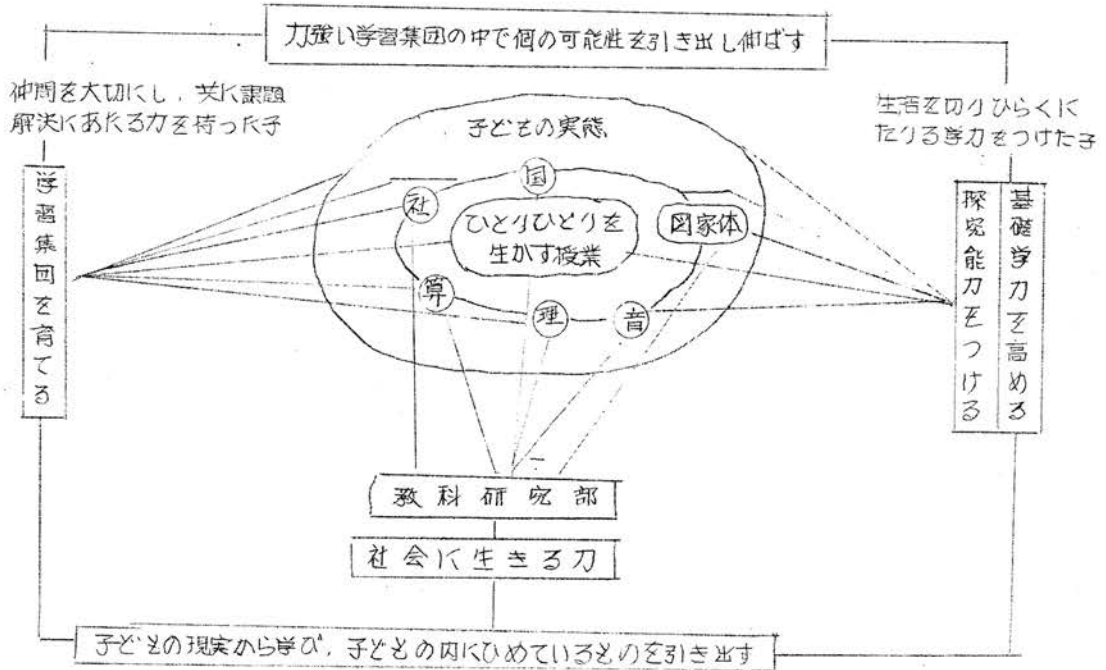
1. 研究テーマの意図

教育の営みは人間形成であり、真の民主社会を確立することであるが、個の可能性の最大発見でもある。個の自主性、協調性、創造性の能力を個性豊かに引き出すことが大切となる。それらを図示すると以下の図となる。



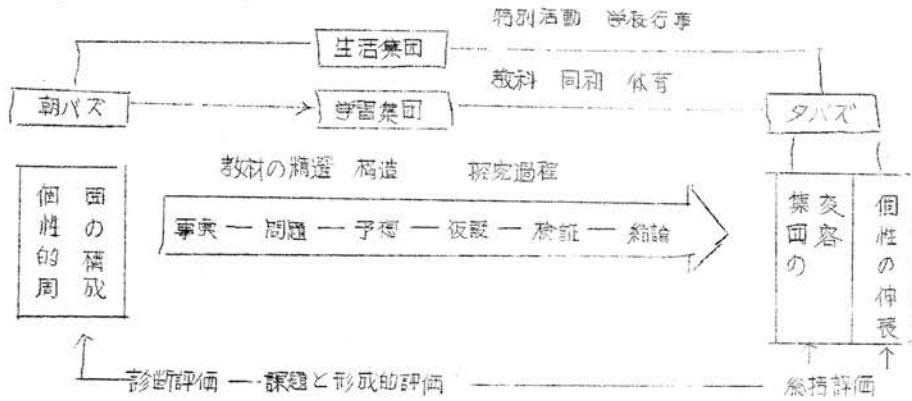
2. 研究組織

本校では、上記目標達成のため、つぎの組織を作っている

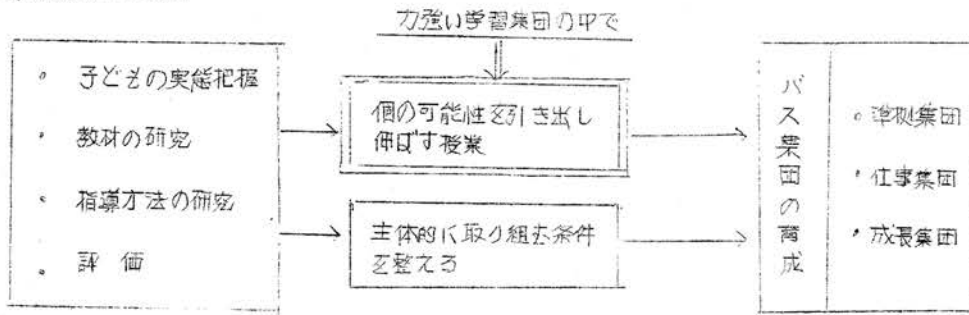


3. 研究計画の構造

バス学習を軸とした研究内容の全体構造



4. 研究の方向と視点



5. 研究の要点 (概要別紙)

(1) 指導方法から見た研究

- ア. 子どもの実態
- イ. 教材内容の精選、精選化
- ウ. 研究過程の精選と学習課題の設定
- エ. 行動目標と形成的評価

(2) バス集団育成の研究

ア. しぐみづくり (準拠集団)

(ア) 小集団の組織づくり

- ・ 実態把握の評価 (ソシオメトリック、Y Gテスト、思考テスト、アチーブメントテスト、学習評価、R R方式テスト、観察、行動評価、相互作用参加の評価)
- ・ 小集団の縮減方法 (生活、学習集団の班づくり)

(イ) コミュニケーション

- ・ 発散的思考、収束的指導、収束的思考の活用と場と運営
- ・ 審くことの指導とそのまとめ方、活用法

イ. ようどころづくり (仕事集団)

(ア) 意欲づくり (同一視、相互性、情報水準、達成動機) (イ) 支時的風土づくり

(ウ) 人間関係 (教師と児童、児童相互) と教育工 学機器の最適化

ウ. ねうちづくり (成長集団)

(ア) 課題と評価 (イ) 学習過程とバス学習の統合 (ウ) 集団と社会規範

6. 問題点

- (1) 学習集団のしぐみ方で ようよい方法があれば明示していきなさいと考える。
- (2) 課題に意欲的に取り組ませるための課題の質の吟味を考えてみたい。

第12回 全国バス学習研究集会

学習集団づくり —— 学ぶことと生きることの統合の場として

姫路市立白鷺中学校

内海 康治

〈研究テーマと 研究の主旨〉

学ぶことと生きることの統合の場としての学習集団づくりをめざして——授業についていけず、ただ座っているだけ、あるいは、黙々と黙殺をうけているだけといった疎外された生徒に、かけがえのない一人の人間としての生き抜く力をもたせ、自ら学ぶとていく力を身につけさせたい。学級という集団の中でこそ、個としての存在がより高められ、育つことを正しく認識させるために、学習集団を組織化し、自分たちの願いをもとにして、社会的正義を追求していく自覚集団をめざして、共に手をとりあって進んでいきたい。

〈研究経過の概要〉

1. 学級集団の中での生徒、家庭での生徒、課外での生徒を観察する。
2. 「わがっているけど実行できない」という生徒にたいして、一人ではできないことをわからせ、学習集団づくりにとりかかる。
3. 班長の選出と班編成
4. 班活動開始（授業内での位置づけ、課題のだしかた、班活動の約束ごとなどについて問題を残さず出発）
5. 短学習での班活動開始
6. 学級全体の反省会をひろく（班ごとに、注意事項を班日記に記入）
7. 班長会議をひろく
8. 班の改編へ
9. 学級通信をとおして、保護者の理解をはかる。

< 問題提起 >

1. 班内での班員の間関係のバランスのとおり方 (現在の学力と人間関係)
2. 教師がいかだして、生徒の「地平」に立つか (木口を出すまいとして、管理面に力がはいる、生徒のほんとうの声が入らない)
3. 教師の姿勢と力量 (いたみを知り、やさしさを持ち、きびしさをもつ)
説教型教育の押し付けでは、精神的二重構造をもった生徒を生み出す。
4. 無自覚集団 → 自覚集団へ (正しい権威感をもたせ、たしかに見とおろきまふこと)
5. 能力主義の世相といわれるなかで、「連帯」感を育てること。
6. 主体的な学習集団を育てる授業展開 (教える教育 → 学ぶ教育)
7. 授業における目標行動を明確にすること。
8. 教材解釈 (構造化) と精選
9. 班活動における課題のたしかた (教師の発問)
10. 評価問題 (個人と班のかかありにおける)

< 特に討論を希望する問題 >

1. 班活動における課題のたしかた (教師の発問)
生徒個人を、班を、学習集団全体を、知的に、感情的に
つなぶ発問
2. 生徒の観念論 — 「わかっているけど実行できない」感覚を打ち破る
ために、やらねばならないこと
・日頃の実践で、「頭ではわかっているけどやる気ない」とぐちをこぼしながら、教師とは、どこへもどバックしていかかづかめなっている現
実からの前進のために。

第12回 全国バス学習研究集会

自主協同学習をふまえた社会科の探究学習

——ひとりひとりの探究意欲をどうおこさせるか——

兵庫県津保郡御津町立御津小学校

1. 研究テーマとその要旨

探究学習をすすめていくためには児童の学習意欲を高めることが根本である。その児童ひとりひとりの学習意欲を高めるために学習課題をどのようにつかませ、資料(教育機器)をどのように活用し効果的なバス学習をどのように育てていくか。

2. 研究経過の概要

①自主協同性を培うバス学習の導入——発表力を高め全員参加の学習をめざして国・社・算理4教科の実践研究……51年度

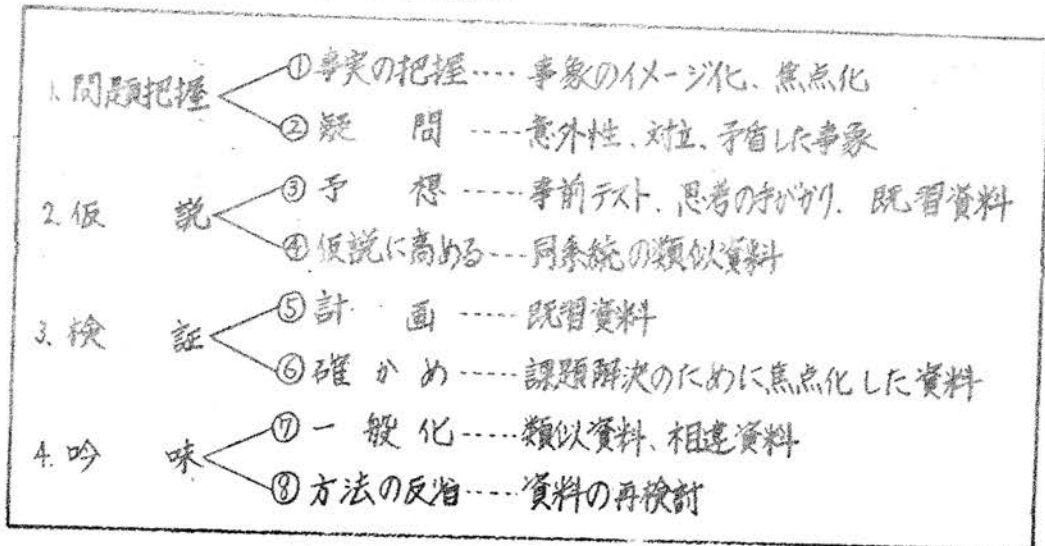
②自主協同学習をふまえた教育機器を効果的に使った社会科探究学習の実践研究……52年度



3. 問題提起

◎社会科探究学習各過程で資料をどのように活用していくか。

(1)探究学習過程と資料活用の視点



(2) (事例) 4年「はなれ島に生きる人々」の学習における資料の活用と問題点

時間	(学習過程)	(資料)	(問題点・バズとの関連)
第一時	① 事実の把握 ・ 位置の確認 ・ 島の地形 ・ 土地の利用	① 地図「兵庫県大地図」(児) ② OHP「家島との連絡船」 ③ スライド「家島群島」 ④ OHP「家島所の土地利用」	* 自分たちとのかわり追求不足 ・ 資料に不隔、おろくに不意 ・ 画面うすいがバズさん ・ バズに効果的
	② 問題設定 ③ 予想→仮説		* 指導計画上の問題 * 仮説へ高められず(時間不足)
第二時	④ 握りめ ・ 水 ・ あかり	⑤ スライド「水道丸」 ⑥ 写真「家島のせんたく場」 ⑦ 表「水道料金表」	・ バズさん ・ 資料不足
	・ 仕事	⑧ スライド「家島港」 ⑨ スライド「はまの養殖」 ⑩ スライド「石材の搬出」 ⑪ OHP「珠石を採る人々」 ⑫ OHP「家島町の人の仕事」 ⑬ テープ「家島の昔と今」	・ つかみにくくバズさん 補説後バズさん ・ 問題意識高まる ・ 演出効果ありバズ有効 ・ 生の声として効果的
第三時	・ 結びつき	⑭ OHP「家島への観光客」 ⑮ OHP「家島との連絡船」 ⑯ OHP「連絡船の休泊回数」 ⑰ スライド「連絡船」	・ バズさん ・ 使い方の工夫が大切
	⑱ 一般化……式根島との比較(類似点、相違点)		* 機器資料の影響

4. 特に討論を希望する問題

- ① 各過程における資料の効果的な(バズをさんにし、意欲・思考・能力を高める)使い方
- ② 機器の特徴を生かし、焦点化された資料の作り方
- ③ 探究過程における機器の使い分け(子どもたちに)
- ④ 機器の活用と現実に向けた子どもづくり

第12回全国バス学習研究集会

「授業における提示機器の位置づけ」

姫路市立琴陵中学校

〈はじめに〉 教育機器を分類する時、提示機器、訓練機器、反応測定機器、情報処理機器などに大別することができると考えられる。しかし一般的に、教育機器と聞けば、OHP、VTR、TR、TVなど提示を主体にした機器を頭に描かれる。本校でも同様に提示機器を中心にハード面の充実が計られている。

最近ではどの学校にも提示機器が充実してきつつあると思われる。そこでこうした提示機器の授業における最適化をさぐると同時に、小集団学習方式にどう融合させていくかをさぐることは価値のあるものと考えられる。

〈現状分析〉 本校では数年前より、教育機器を有効に位置づけた学習指導過程の研究を続けている。市の研究発表を通して機器の利用度が飛躍的に伸びていった。本校における提示機器はOHP、VTR、SLP、16mm、TR などである。各教科における利用状況を指導過程とのマトリックスでとってみた。

提示機器	国語			社会			数学			英語		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
OHP		○		○	○		○		○	○	○	○
VTR						○	○					○
S-LP				○	○					○		
16 ^{m/m}				○								
TR	○	○										○

A = 導入 B = 発展 C = まとめ

<マトリックスに関する考察>

1. OHPがどの教科においても、しかもどの過程でも平均して用いられている。投影する手帳しだいでの過程においても使用が可能であると考えられると同時に TPの作成がその効果を決定すると思われる。

2. 発展段階での機器利用が小集団学習との融合の可能性が最も高いと考えられるが、集団思考を志向した機器利用を考える必要がある。

3. 導入段階での提示機器の利用度が高いのは Dale & Billows の理論を裏づけている。

<問題提起>

1. 機器による情報提示をどのように集団思考に結びつけるか。

2. ソフトウェアの開発にどのように取り組んでいるか。また費用面はどうなっているか。

3. 提示機器の複合利用をどう行っているか。

第12回全国バズ学習研究集会

同和教育をふまえた学習指導法の改善

姫路市立林田中学校

〈研究テーマ設定の理由〉

本校の同和教育は、差別の解消・部落の完全解放という観念的な教育にとどまることなく、人間形成、人間変革を目標としている。したがって、従来の教えこみ中心の授業では、同和教育の視点に立つとき、「授業についていけない」「授業がわからない」生徒をなくしみんなで問題を解決していく連帯感や、人間尊厳への自覚を促すこともできないので認知的目標と態度的目標の同時達成をねらうバズ学習の実践的研究こそ、同和教育の推進につながると思いこのテーマを設定した。

〈研究経過の概要〉

- 47年 小集団学習・バズ学習にとりくむことを検討し、先進校の参観文献の研究にとりくむ。
- 48年 基本的体制づくりと教科指導に積極的にとりくむ。
塩田先生を招へい、直接指導を受ける。
全員/年/回の校内研究授業を実施。
- 51年 PTA 対象に「学習の現代化について」塩田先生の講演を聞く。
- 52年7月 本大会への参加、並びに提案することを決定。
8月 家庭研修のテーマを設定し、レポート提出。
9月 学年教科担当者の相互参観実施。
本年度は特に基礎学力の充実に重点をおき、特設バズのあり方を重視し、研修部と同和学習部が密接な関連をもちながら研究を進め現在にいたっている。

〈問題提起〉

1 問題となった点

- ・学習意識の変革の困難さ。
- ・話し合いの態度・技術、話し合いの内容と質の高まり。
- ・基礎的、基本的学力のおさえと身につける学習が不足。

2 特に重点をおいてとりくんだ点

- ・授業と復習バスと家庭学習をどう結びつけるか。
- ・バス学習の効果を高めるため、教材の精選と学習の構造化。

3 今後解決しなければならない点

- ・学習能力の低い生徒の参加度を高めつつ、学習能力の高い生徒の要求を満たしていく困難さ。
- ・濃密な指導のあり方。

4 将来の展望

- ・未来に生きる生徒に、生きて働く実践的な能力を身につけ、差別を見ぬき、差別の解消にとりくむ態度を育てる授業の創造。

〈特に討論を希望する問題〉

- 1 課題解決への意欲を掘り起せない場合の対策。
- 2 班活動でリーダーが活動しすぎる場合の対策。
- 3 濃密な指導のあり方で、同室別卓指導方式の是非。

六12回 全国バズ学習研究集会
7校時班バズでの個別指導の工夫
姫路市立琴陵中学校 矢内正弘

《はじめに》
7校時にどういふ手だてをすれば、各組で4.5名ほどのおちこぼれた生徒を救っていけるか、という問題は大変難しいことで、テーマにあげたものの、その途は暗中摸索の状態といつてよい。おくれた生徒が今までとりこんできた方法で果してどれだけ救われていけるか、教師側にも確信がもてない。昨年度の7校時存続か否かについての全体研修会でも、7校時は生徒と担任の接触する時間になっているから必要である。時にはカウンセリングもやっている。

- 50分授業にもどして授業の中で遅進児の指導にかかわった方がよい。
- 最底辺の子の救済ということであれば、バズの形式では無理ではないか。
- 人間関係を深めていく^{上から}生徒指導上の意味は大きい。(略)

等、教師側にもいろいろな意見も見られるが、とりあえず改善の方法をみつけ7校時を今年も設けるとの共通理解の上になつている。

《研究経過の概要》

本校では周和的な見地から、授業がわかりにくい生徒のための手だてとして、4.5年前から研究し、普通授業を45分にして30分を生み出した。この時間の目的にかなった使い方について、全職員でまた学年別で何回も研修し、討論を重ね、いろいろ工夫していった。復習バズ的にその日の学習内容を班ごとに復習したり、教科委員が課題を出し、それにとりこんだ後、わかりにくい生徒には班内で互いに教えあつたり、その方法も同じではない。しかしどうしても組の中で4.5名のおちこぼれた生徒に焦点をあてたとりくみは十分にできたとは思われない。昨年度の7校時についての生徒のアンケート(全部で11項目、52年2月実施)の結果(略)からも本校生徒の個人主義、利己主義的な傾向が目立ち、班のモラルを高める努力、生徒同志の協力助け合い関係はいまだ十分とは感ぜられないので、これからの指導上特に留意する必要がある。

《問題の提起》

ひとりの遅進児に(種々の事情からおくらされた生徒といたいが)ひとりの生徒があたるマンツーマン方法をとる。いま5人いれば5人の生徒がその学習の手助けをとる。

そのペアのつくり方だが 教える生徒と遅進児の両方から慎重に考えさせえらばせる。両方がよく納得する相手でないといけない。そのペアは同じ班にするわけだから班編成の際からよく考えておく。2人の人間関係が好ましい関係であることが必要条件となる。それだからといって遅進児をその生徒にまかせてしまうわけではない。先生がやっても十分効果が上がらないのに ひとりの生徒にまかせられない。

とりくみ

1. 教科は国数英の3教科とする。 2. 生徒の選定は診断テストでえらぶ。
3. 月 は 国 火 は 数 水 は 英 木 は 予備日 とする。
5. 級友全体にも趣旨の徹底をはかる。 6. 各自ノートを使用する。
7. 最初の仕えなどは組の担任が巡回して個々に指導する。主としてドリル的なことをペアでやる。
8. 教科担任ともたえず連絡をとり（ノートの点検 指導法などで）組の担任、教える生徒と遅進児が互いに密によく連絡をとる。
9. 学習するプログラムは教科担任のオにて作成する。

プログラム（例 数学）カルテ

	プログラム	月				
		日				
1	整数の加法					
2	整数の減法					
3	かけ算の九九					
4						
5						
	印					

《 特に討論を希望する問題 》

1. プログラム資料に何を使えばよいか
2. 教科担任との連携をどういう方法で密にしていくか。それも継続していける形でないといけないと途中でいきずまってしまう。
3. ピックアップする生徒の抵抗感をどうすれば少なくなるか。
4. 評価をどうすれば 教える生徒と遅進児の満足感が得られるか。 （以上）

第12回全国バズ学習研究集会

高知県安芸郡東洋町立野根中学校

〈研究テーマとその要旨〉

教育不正常とは、子供側からは「教育を受ける権利を放棄」し、
また、一部の生徒にはその権利が必ずしも保障されていないし、教師側
からは「教育権が剝奪されようとしている状態のこと」であろう。不正常な
本校の生徒の実態を毎日の記録の中からおもむきづつものを記すると、次の
ようである。毎年ガラス代金が40～60万、普通教室以外はほとん
ど割られ、一部の教室は窓わくも全々壊れた。授業中教室の窓から出入
はあふりませ、休み時間、授業中の区別なく職員室は生徒が占領し大声
を出して笑ったり、教師の頭をこぶき中には首をしめられて失神した教師
もいた。服装は色シャツ、パンなどを授業中でも平気で喰っている。教師
とのトラブルも多し、教師の正当防衛の範囲についても真剣に討議された。
このような不正常な状態が長い間続いた。以上のような生徒の実態をふ
まえ、学校正常化を目指す研究と実践をつまかさねてきた。

〈研究経過の概要〉

問題行動を分析してみると、生徒間の人間関係の不成立、教師不信と生
徒、教師との人間関係の不成立、集団意識の不足、低学力、地域父兄との
関係、環境の整備、同和教育の推進(同和地区の生徒が毎年70～80%、クラ
スによつては90%をしめている)などのいろいろな分析がなされ、オ1
段階として学級経営の充実(特に生活指導)を中心に「小集団を通じて人間
関係を高め規律ある生活態度を身につける」の目標を設定して取り組みを始
める。集団意識を高め望ましい人間関係を育てるための手法としてバズ
学習(生活バズ)の研究を全校的に始める(班編成、生活バズ)。オ2段階とし
て学級経営の充実を計りながら生徒会の組織化と全校生徒集団指導へと
発展をめざす。生徒会の目標を「人は皆と生きよう、皆は一人を生かそう」とし、小集団活動を通じて助け合いのできる仲間づくりに努め、班—学級

一全校へと、集団化、活動の組織化を計り、学級と生徒会活動の関連を密にし、全校集会を組織し生活点検へと発展させる。

<問題提起>

1. ズッコケ生徒の多い、学校での生活指導の有り方
(生活バスの場合に 競争的母援助活動は)
(地域父母の関係をどう結びつけるか)
(行事とバスとの関係は)
2. 生徒指導を学習指導へどのように発展させるか。

<特に討論を希望する問題>

1. ズッコケ生徒の多い、学校での生活指導の有り方。
2. 生徒指導を学習指導へどのように発展させるか。

第12回全国バス学習研究集会

三作りに立つ教科指導

「学ぶよろこびを味わえる子供

「ひとり、ひとりの考えが出しあえるバス」

岐阜県土岐市立泉中学校—バス小委員会—秋山 小环 佐藤

〈「三作り」〉

学校教育目標「実力のある民主的実践人の育成」を達成するため、私達はバスを教育活動の基底に位置づけている。それは、バスが民主主義の基本を支えるものであり、具体的にバスを子供の手にて実践していくことが、方法論的にはバスを実践していきける子供に育てることであり、価値論的には民主的実践人を育てることになり、教育目標達成することができるからである。

民主的実践人としての子供に育てるために、子供が毎日の学習活動を営んでいく中での目ざすものとして「三作り」を基本理念として位置づけている。そしてその価値目標としてA 協同の目標をめざしてくめあて作り> B 自分を生かしながら自分作り> C 集団を高めよう仲間作り>を明示しこのA、B、Cの総合が民主的な人間としての生き方の三つの原理であると考えている。

〈経過〉

小集団活動を通じた生徒指導であり、小集団といっても、いろいろな考えがあり、ここでは、学級集団をいくつかに分割した分団、すなわち4人を1組とした小集団を意味している。最近の生徒の傾向を見ると、豊かな社会性を育てるためにも人間関係について学習することがいかに大切であるかがわかる。こうした生徒の社会性を育てていくには教師の意図的な指導だけでなく、人間関係が営まれる場を与える必要がある。よい個人は、よい集団から、よい集団はよい個人から、つまり、個人と集団は表裏一体であるという点を重視し、小集団活動を通して三作りを高めたいこうとするものである。

リーダーの指導 グループ編成 日直 グループ日記 黙考
黙書 生活バス 三作り点検評価 生活バスと重点項目
学習バス(個人と相互と全体・補強バス) 教科内バス 研究バス

上記してある具体的な場を通して小委目標へさらに研究テーマ、学校教育目標に近づいていこうと毎日、実施、反省、改善の気持ちで前進している。

<現状>

- 教科内バズの減少(予課の出し方 方法分析)
- 黙考・黙書の意味を忘れている(教師・生徒)
- 点検集訂に終始し、お互いを厳しく追求したり、グループの問題について話し合うことがなくなった。
- なれ合いの雰囲気が強くなり行動面にも出てきた。
- 追求し合う厳しさが生活バズから薄らいで、連絡化している。
- リーダーとフォロアーの役目とつながり
- 個人追求の意味を忘れている
- 予課的な課題から復習的課題へ生徒が歩み出している。
- 補強バズのあり方について。
- 個人点検の甘さ
(良い面は略してみたり時、バズ小委として考え、見つめている点)

<具体的方途>

- 話し方・聞き方の技術——他の生徒の意見を自分の考えとくらべながら聞く
- 力をつける——充実感をみつけさせるためには、能力に応じて考える予課の出し方と仕方の説明をはっきり提示する。更に補強バズの利用
- バズポイント——授業の終わりに書かせ、次時のつながりを示しておく。小黒板に記入し、学習バズ時にすぐとりかかるとする。
- 人間関係——教科の本質につながることは当然であるがバズ時、ノートを利用して暖かい関係をつくっていく。
- 研究バズ——厳しい追求と向上をめざした意見交流会とし、生徒会とのつながりを密にする。

<問題提起>

- 時間が「ない」という表現が他校の先生方に指摘されるその逆は、よくやってみえよと本意がされる。そんな中で私達は常に前進を考えているが、生徒間における「慣れ合い的行動」をいかに最初にもどって考えさせ、厳しさのあるひとり、ひとりにするか。
- ‘ゆとりある教育’という言葉が身ぶりがになり、そんな中で個々に応じた学習をどうして力をつけさせてやりたいか、学習(特設バズ)返りか利用していったらいいか、更に現状においてもそうであるが復習課題についての考え方と予習課題とのかかわり合い。

第12回 全国バズ学習研究集会

ひとりひとりが個を生かしよりよい変容を求めるために

愛知県春日井市立藤山台中学校

1 研究テーマとその要旨

教育の場において、基本的に重要視されていることは、生徒を人間として尊重するということである。したがって教師は、生徒ひとりひとりに応じて、ひとりひとりを生かす指導に最大の努力をほらなければならない。そのためには、生徒ひとりひとりのもつ発達の特性、能力、性格などについて、それをささえている条件とともに、深く理解することが前提となる。その上に、適切と考えられる指導の方法をうだしていかなければならない。しかし、生徒ひとりひとりの変容をうながすものは、教師だけではない。生活全体の中で、いろいろの条件にささえられ、それぞれに経験を集積しながら、その過程で変容していくのである。だから、その条件となるもの、①集団、②友人、③家庭などをよりよい方向へ変えていくことも極めて深いかかわりがあると思われる。同時に教師もよりよい変容をしていかなければならない。

2 研究経過の概要

この研究テーマに取り組んで、3年目を経過しようとしている。初年度は、生徒ひとりひとりのよりよい変容を期待して、「生活の統合化」「集団の機能」「きびしさと深しき」「自律と他律」の4つの強調点をふまえて、ひとりひとりの自覚を高めてきた。

教科指導の場では授業構造の研究、学習態度の育成などにつとめたり、短学活では、「わたしの主張」「清掃宣言」などを試み、その充実を図ったり、また、クラブ活動においては、練習にくふうをこらし、効果的な運営を考慮してきた。

2年目も、学習、学級経営、クラブ活動の面から、生徒ひとりひとりが自己をみつめ、自己をみがくことによって、自己をより高めていく方法を模索した。

本年度は、生徒ひとりひとりを理解する具体的な手だてについて考え、その日常化につとめ、実践したことについての分析と検討をした。それをよりどころとして、ひとりひとりを生かすことにつとめてきた。

3 問題点

(1) 問題となった点

生徒ひとりひとりを理解するといっても、それは、ある時点におけるそれであって、固定的なものではなく、連続的に変化していくものである。また、中学校ではひとりひとりの教師が、ひとりひとりの生徒を理解することには限界がある。それは主観的であり、また一面的な見方に陥るおそれがあるからである。だから情報交換が必要であるが、これを日常化することに乏しかった。

生徒を指導する段階になると、それが長期にわたる場合やごく短期間で終わる場合など生徒それぞれによってまちまちである。そのための手だてなどについて具体化しなければならない。

(2) 特に重点をおいて取り組んだ点

抽出生を決め、9項目(①抽出理由 ②基礎資料 ③観察 ④対話 ⑤指導法 ⑥指導の変態 ⑦その後の観察 ⑧変化の傾向 ⑨指導の反響)にわたって考察してきた。

抽出生を設定したのは、常に多くの生徒を理解することができないからである。したがって特定の生徒に重点をあて、深い理解と指導をしたいからである。その結果、生徒ひとりひとりを理解する教師の目と心が向上し、その力は他の生徒にも転移されることを期待するからである。

特定の生徒を抽出するというのは、極めて長期間がたくなにこだわるということもあろうが、1〜2か月あるいは1学期間というように、割合短期間の抽出の場合もあろう。そうした短期間逐次抽出すれば、学級内のより多くの生徒を抽出対象とすることができるので、抽出生を軸かすことを配慮した。

(3) 今後解決しなければならない問題点

抽出生の理解と指導はかなり深化することはできたが、それだけにとどまろうとはしていない。ひとりひとりはすべて異なる。ひとりひとりの生徒に適用した指導は、その生徒のみのものであり、他の生徒におそらく適用できないだろう。したがって究極的には、すべての生徒を理解し、それに応じた指導をしていかなければならない。

(4) 将来の展望の上に取り上げらるべき問題点

教育課程の基準の改善のねらいは、①人間性豊かな児童生徒を育てること、②ゆとりのあるしかも充実した学校生活を送れるようにすること、③国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視するとともに児童生徒の個性や能力に応じた教育が行なわれるようにすることなどである。このねらいは、いすれもひとりひとりの児童生徒に對して行なうものであり、今後は、それを達成するための具体的な手だてを確立していかなければならない。

(5) 特に討論を希望する問題

・抽出生を設定して指導することについて

人と物のはたらきに目を開かせる低学年のバズと実践化の問題

——交通安全教育の実践から——

滋賀県神崎郡五個荘小学校

本校は、昭和51・52年度滋賀県教育委員会指定の交通安全指導の研究校となり、その実践に取り組んできた。地域の実態から「変化する交通環境に適應できる実践的能力や態度の育成」の研究主題を設定し、バズ学習体制による交通安全指導を行つている。その中から、今回は低学年部の実践を通して問題を提案することにした。

研究テーマとその要旨

低学年の子どもはよく動く。前後のみさかきもなく動くのでハツとさせられることがある。一般に、視野が狭く、目先のことに夢中でストップがきかないということであろう。しかし、そういう動きのなかで、よく物にさわり、さぐりながら体験を深めていく特性がある。テーマにある人と物への着眼は、低学年の子どもの特性にそつたものである。人と物のはたらきに目を開かせることにおいて、安全の意識化をはかり安全な行動力を培うことはできないだろうか、というのが私たち低学年部の願いである。しかし、ここで問題なのは、認識から実践行動へスムーズにすすまないということである。私たちは、この認識と実践のずれを認め、両者を相対的に高めることにしている。

研究経過の概要

私たちは年度初めに、地域と子どもの実態から「人と物のはたらきに目を開いて、安全な行動のしかたに気づく子ども」のテーマを設定し、このテーマにそつて研究や実践をすすめていくことにした。以下、授業及びカルテづくりについて、その事例を記す。

1. カルテによる子どもの把握と指導

私たちは学級の数人の子どもを対象にカルテづくりをしている。子ども像を描き出し、具体的な指導の手をさしのべようとするものである。

氏名	M男 2年	字	稔 瀬	指 導 と 実 態
検査と所見 A P P検査 52年 2月 総合判定 (よし)	特 質 や、短気で感情的になりやすく涙もろい 女子の前でい			4/20 通学路の違うTさんと学校帰りにいつしよに遊ぶ約束をしている。Tくんを家に連れて行こうとしている様子なので、一旦、正しい通学路を通つて帰宅し、その後遊ぶよう注意する。
動作の安定 度と自己統 制が黄、そ れ以外は全 部青。	ばつたり、陰 でいたずらす ることもある 知識・理解良 く、思考力も クラスの上位			4/21 昨日の注意にもかかわらず、Tくんは自分の通学路でない道を通つていたのを家庭訪問中見かけたので、Mくんにもどうしたのかたずねたが、Mくんは言われたように一度家に帰つたとのこと。注意を守つたのでほめる。
52年 7月 総合判定 (注意)	運動は好んで するが、不器 用で動作は遅 い。整理整頓 も「自分の欠 点だからなお す」と言いな がら、いつも			4/25 交通安全の自分のめあてとして「補助車ははずしたい。」と発表。多数の子が補助車ははずしているのに、自分がつけていることにひげ目を感じている様子、十分練習してからするように言う。
自己統制が 赤(3)に落ち こんでいる 以外は全部 青。				5/4 社会のお店しらべを家庭学習としてするため、K子と一緒に県道沿いの

<p>乱雑にしていることの方が多い。</p> <p>家庭的には父と祖父が厳格。母と祖母は「長男なので危ないことはさせないよう育ててきた。」と言われる。</p> <p>幼稚園の時、県道を横断しようとして、行きすぎた車の次の車にぶつかりそうになつたことがある。</p>	<p>二軒の店に出かける。「車がよう通るで気をつけて行くわ。」と言つていた。</p> <p>5/13 学校の自転車コーナーで自転車に乗る予定だつたが、「補助がないのでかなん。」と言つて乗らない。</p> <p>6/27 今まで、Mのグループの下校の分団長はK子と、自分たちで決めておいたようだが、今日になつて「ほくもやりたい。」と押し通し、K子との間で、口論になる。結局、グループ全員が一日交替で分団長をすることで納得する。</p> <p>7/4~5 反省カードに「Mくんがいけなかつた。いじわるをする。」と続くので、聞き正す。水筒のお茶を飲んだりふざけたりしている様子なので、注意「このグループは皆女の子なのでかなん。」ともらす。</p> <p>7/12~15 めあてをしつかり守つて下校したので、シールをはつてほめる。「ほくらだけ皆上手にできた。」と大喜びする。</p> <p>(以下・略)</p>
--	---

つぎの「じてん車ののりかた」の授業で、M男の場合は「補助車と事故」という視点で授業に位置づけることができる。

2. 人と物のはたらきに目を開く授業の展開

(1) 2年「じてん車ののりかた」(ロング)

この授業は、一枚の写真を手がかりにして、子どもたちに自転車事故の原因をさぐらせ、曲がり角での注意を意識させたものである。子ども

たちは、とび出し事故としゃへい物としてのへいのかかわりに目を開いて、見通しのよくない道路へのとび出しの危険に気づく。へいのマイナスのはたらきによつて、ダンブカーと自転車の衝突がくつきり浮かびあがる。

ここから、おまわりさんに聞いた曲がり角での注意 後方を見ることが、手で合図すること、右・左・右を見て行くことが自転車乗りのけいこで行動化される。

(2) 1年「あぶないあめの日」(ロング)

雨の日の下校に見られる子どものふるまい、かさをもつていたずらしたり道いつばいになつて話しながら帰つたりすることから起こる危険を予測して行われた授業である。5人の下校なかまの切り抜き絵から、かさのさし方やすべる靴のことが問題化され、実験が行われる。おわりに録音された母の声が子どもの心にしみわたつていく。かさのさし方や事故と下校を待つ母の気持ちのかかわりに目を開いて、下校における自分たちの行動を見直している。

(3) 安全旗をつくる1年の子ども(活動)

入学してまもない1年の子どもも上級生といつしよに集団登校する。その上級生たちのつかり安全旗や笛から思いついて、1年生だけの分団下校にも黄色い安全旗が役立つと考えて自分たちの手で製作する子どもが出てきた。ここには、単に安全旗をもつのがおもしろいというのではなく、安全旗のはたらきに目を開いた子どもが自分たちの下校を安全にしようとする意欲が見られるのである。

(4) 1年「信号と事故」(ロング)

国道8号線を横断するところに信号がある。車が通るときは100秒ぐらいの時間があるのに、歩行者の横断時間は17秒しかない。ある子

どもは、このことに理不尽さを感じ、信号は車のためであると発表した。この考えに対して他の子どもが発言するなかで、信号が置かれるまえ、ここで横断中の事故があつたことを出した。この発言がきっかけで、8号線にかかる歩道橋や地下道、信号のはたらきが見直されはじめた。さきの子どもも信号の時間の長短が、人や車の流れをまもっていることに気づく。ここで、17秒の信号を集団でわたるにはどうすればよいかの問題になる。

(5) 2年「道でのあそび（とび出し）」（ロング）

一郎君の自転車乗りのスライドを見たあとで、T発言「お隣りの人が一郎君と思つて、みんなから一郎君に何か言つてあげてほしいのです。」で二人バズが始まる。

C₁ 発言「後ろ向いて自転車にのつていては交通事故にあいますよ。」

C₂ 発言「あんたもスピードだしてのつてるやろ。」

C₁ 発言「あんたもスピードだしてのつてるやろ。」

C₁ 発言「あんたにおいつこうと思つていそいでるのよ。あんたこそ前をしつかり見てなあかんよ。」

C₂ 発言「おいついてくるで後ろ向いてるのよ。」

C₁ 発言「……………」

C₂ 発言「……………」

C₁ 発言「あー、もうどうかなりそうや。」

C₁ 発言の「あー、もうどうかなりそうや。」ということばは、二人が話し合っているうちに、だんだんスライドの中の子どもになりきり、なんかもう自分が事故をおこしそうになつていたたまれなくなつてきた結果と思われる。

3. ショッキングなN君の事故

夏休みに、自転車によるとび出し事故が発生した。1年のN君が道を横断しようとして高速の自動車に衝突して死亡した。一旦停止をしなかつたことが原因らしいが、交通安全指導を実践している本校にとつて、大きなショックであつた。N君の事故は家の近くで起きたものだが、学校と地域とで見せる子どもの顔はちがうという。そこには、たてまえと本音のようちがひがある。こういう事故から、私たちはいま実践している安全教育（バス学習）の姿勢に再検討を加えようとしている。

問題提起

1. N君の事故を契機に、何をどう変えればよいのか。

低学年のバス（学習バス、登下校バスなど）と実践化行動化の問題で、それを結ぶ学習内容や課題をどう設定するかの問題をめぐつて。

2. 確かな指導のためにカルテをどう生かすか。

授業案にカルテでとられた子どもをどう位置づけ、指導するかの問題をめぐつて。

3. 安全教育における低学年のバスで、大事なもの（めざすもの）は何か。

安全教育におけるバスは、そのまま安全生活に密着している。登下校などでは事故につながる切実な問題がそこにある。2人バスから始まる低学年のバスで、安全意識をどう高めるかの問題をめぐつて。

特に討論を希望する問題

安全教育における低学年のバスをどう育てればよいのか。安全生活に結びつくためのバスのあり方（バスの方法、課題、態度など）の討論。問題提起1, 3に関連して。

第12回全国バス学習研究集会

学校生活からはみ出す生徒をなくしていく生徒指導

姫路市立白鷺中学校 道上昌幸

1. はじめに（研究テーマとその要旨）

最近の青少年の非行は、増加とともに低年齢化の傾向にある。とくに憂うべき現象としては、女子の非行の急増である。本校においてもこの社会の風潮の外にあるものではない。なぜ、このような現状になってきたのであろうか。いろいろな要因が考えられると思うが、その中で教育活動に関係があると思われるものをあげると次のようなことがいえるであろう。

(1) 内部的要因

- ① 教育は、生徒にひとつの型を身につけさせ、それを基盤に新しい能力や資質を伸ばしていくとなみであることを軽視している
- ② 生活の中で体験する試練を自力で乗り越えさせようとしないで、簡単に周囲から構う。そのために、生徒たちは「何くそ」と立ちあがる強さや気力を欠いてしまった。
- ③ 教育活動における教師としての自覚を喪失している教師がある。最近の教師には、生徒にきびしさを指導しないで「ものわりのよい教師」になりたがっている人が多い。
- ④ 教育活動では、生徒の心理発達を考慮することが必要であるのに、指導の段階でこれを無視あるいは考慮しないで、結果的には放任のようになっている。
- ⑤ 教師集団が共通の目標をもった集団であるという連帯感を喪失している。協議してもその場で議論するだけで、以後の教育活動には生かされていない。

(2) 外部的要因

- ① 市の中心部を校区にもち、大部分が商業地域である。そして、職業構成が多岐にわたっている。
- ② 土着の住人、生え抜きの人々が少ない。
- ③ 経済的に上下の差が大きい。
- ④ 外国人がかなり多く混住している。とくに戦後外国人となった人々。
- ⑤ かつては他校区からの越境通学者が多く、いわゆる有名高校への進学率が高く、名門校といわれていたことがまだ消えないである。

以上あげた要因が、学校生活に興味を失わせ、はみ出た生徒をつくって問題行動に走らせていると考えられる。そこで、これらの要因をひとつひとつ取り除くことが、教育諸活動の条件を整えることになるであろうと思われる。

2. 現状打破への取り組み（研究経過の概要）

前節でふれた教育活動の諸条件を整える積極的方策としては次のようなことが考えられる。

(1) 教科内で考慮すること

教科学習においては、教授方法の改善 すなわち 一斉授業か 小集団学習か ということである。

一斉授業では、大部分の個の特色は無視されて授業が進められていく場合が多い。したがって、問題解決のためによい方策とはいえない。個の特色が活かされる教授方法がとり入れられなければ、ひとりひとりの生徒は生き生きとしてこないであろう。

小集団学習では、この点がかかなり改善できるのではないだろうか。全員が何かの役割をもち、発表の機会をもつことができ、自分の特色を生かして学習する活動の場を得ることができるであろう。そこから 個に応じた自主性が育ち、はみ出ることを多少とも防ぐことができるであろう。個の特色が発揮でき、認められれば生き生きとした生活をもつであろう。ここに問題解決のひとつの方策が見出せるのではないだろうか。

(2) 教科外で考慮すること

生徒が参加する教科外活動としては次のものがある。

生徒会活動、全校クラブ活動、学級活動、学校行事、野外活動、部活動 これらの活動では、教科学習以上に 個の特色を発揮する場は多いと思われる。また、教師主導型でなく、生徒が主体となって活動し、個を伸ばす機会でもある。したがって、これらの教科外諸活動は、学校生活からはみ出させない指導をするのに適切な場といえるであろう。そのためには、生徒が活動しやすいように教師が配慮して、放任にならないように指導することがたいせつである。

本校の現状を以上の見地から見直した場合、必ずしも適切な教育活動がなされているとはいえないのではないかと思う。教科学習では一斉授業が大部分であり、教科外活動においては、自主性尊重の名のもとに指導の手が充分加えられているとはいえない。そこから、気ままで自己抑制のできない衝動的行動をする生徒が育っているように思われる。これらの生徒の行動は、当然の結果として、補導や臨床指導の対象となって、行動について指導しなければならなくなっている。根気よく教育相談をくり返して正常な学校生活ができ、はみ出させないように軌道修正をしなければならない。

(3)補導の現況

本校に関係のある補導組織をみた場合、複雑であることに気づく。

市青少年課所属の補導センターの白鷺校区補導委員会

同 上 校外保導連盟城南支部

同 上 白鷺校区愛護育成協議会

白鷺中学校育友会 (P. T. A.) 補導部

自治会提唱の社会を明るくする運動の青少年対策組織

その他 子どもを思う ということ組織がつくられようとしているが、これらすべてに教師がかかるとすれば、本来の生徒指導にあてる時間が制約を受けるようになり、どうしても手落ちができてやすくなる。もっと合理化して単一組織にする必要があると思う。また、活動内容も教育的視点にたつて、学校、地域(校区)、家庭の三者が一つの次元で充実した生徒指導がなされるべきだと思われる。補導が生徒指導の主な内容でないことはいうまでもない。むしろ、補導を必要としない生徒指導の充実をはかりたいものである。

3. 問題点(問題提起)

(1) 個人の生活記録の形式、内容はどのようなものが効果的か。

(多忙な中で、教師が短時間で多数みることができるもの)

(2) 生徒相互の話し合いが効果をあげるのは、どのような条件がみたされたときか。

方法、場所、設定の時間、所要時間、教師のかかわり方

4. 特に討論を希望する問題

(1) 学習結果(テスト成績)にこだわり、利己的な保護者や生徒の多いところでは、小集団活動をどんなことから出発させると効果があるか。

(2) 生徒指導に小集団を活用することに消極的な教師の考えを どうすれば積極的にすることができるか。(教師の共通理解を求めるための手だて)

第 12 回 全 国 バ ス 学 習 研 究 集 会

— ひとりひとりの生徒(難聴生徒)がもっている能力を最大限
に伸ばし、自立できる生徒を育てるにはどうすればよいか —

兵庫県姫路市立白鷺中学校

多 根 貞 武

< 研究テーマの要旨 >

中学校に難聴学級が開設されてから十余年になるが、この間に難聴学級も大きく変化したといえる。それは、聴力損失の大きな生徒の入級が増えているとか、聴覚障害だけでなく、言語、知能、情緒面に障害のある生徒の入級をみてもいえることである。このように多様化した難聴生徒の指導を、どんな方法でどのようにすれば、ひとりひとりの生徒がもっている能力を最大限に伸ばし、自立できる生徒に育てることができるかということの研究することは、ひじょうに大切なことだと考えられる。

< 研究経過の概要 >

1. 本校の難聴学級の目標

- (1) 生徒自身、自分のもっている能力や特性を十分に発揮し、社会や学校生活によりよく適応して、豊かな人間性と望ましい人間関係を養う。
- (2) 聴覚や言語の能力を高めるとともに、障害に基づく種々の不利な条件を克服して自己を実現していく人になる。

2. 目標達成のための基本方針

- (1) 生徒の聴覚や言語についての特性や程度および能力、その他の条件を適切には握する。
- (2) 生徒は全員親学級をもち、健聴児と全く同じ環境の中で学習をする。そのためには聴力の損失というハンデを取り除くための手だてを十分に作る。
- (3) 聴能訓練・言語指導を特別に行なう。

(4) 親学級担任、保護者ならびに難聴学級担任の密接な連けいによって指導の充実をはかる。

3. 以上のような目標と基本方針のもとに、本校では次の方法で行なってきた。

(1) 個人票の作成

生徒個々の実態をは握するために個人票を作成する。

(2) 親学級制度の実施

ア 親学級へ配置するばあい、グループ → 個へ

イ 知能の低い生徒や学力の遅れがひどい生徒は難聴学級で指導する。

② 聴覚補償

親学級での生活や学習の際に

ワイヤレス方式 → FM ラジオ方式

(3) 聴能訓練・言語指導を月曜～金曜の放課後の第7校時に行なう。

(4) 学年協議会、難聴親の会等を定期的にもつ。

<問題提起>

普通学校に難聴学級が誕生してから7年になり、その数もひじょうに多くなったが、まだその教育の方法についてはさまざまな考え方がなされ、もっとも良い方法というものはいまだ発見されていない。本校においても親学級制度一つとりあげてみてもかなり定着しているように見えるが、遊ぶときなどすぐに難聴生徒だけかたまって遊ぶとか、親学級ではひじょうに小さな声しかださないが難聴学級では大声で話すなどいろいろな問題をかかえており、このような問題をかかえながら今まで述べたような方法で暗中模索している状態である。

1. 普通学校における難聴生徒の教育はどうあるべきか。

(1) 望ましい交流のあり方はどうあるべきか。

(2) 基礎学力と進路保障の問題をどのように解決すればよいか。

2. 入級基準と二次的障害の問題をどのように解決すればよいか。

<特に討論を希望する問題>

望ましい交流のあり方について — 入級基準・進路保障と関連づけて —